

# 教育研究業績書

2017年10月20日

所属：看護学科

資格：助教

氏名：杉浦 圭子

研究分野	研究内容のキーワード
看護学	老年看護学, 地域看護学, 家族看護学
学位	最終学歴
保健学博士	大阪大学大学院 医学系研究科

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
<b>1 教育方法の実践例</b>		
1. 学生会活動幹事懇談会の学生支援	2015年7月～2016年12月	幹事学生に対し、年に2回行なわれる幹事懇談会を企画、開催し学生支援を行なった。懇談会時に出された意見を集約し、他教員とも協働し、必要な対処を行った。結果は報告書としてまとめて提出した。
2. 新入生宿泊研修におけるマナー講座の実践	2014年4月	例年入学直後に行なわれる新入生宿泊研修において、2日目のプログラムとして、外部講師による「マナー講座」を企画した。講座の内容は、挨拶の仕方、人からどう見られるか、どのような人が好ましいと感じられるか、についての講義と壇上で好ましい挨拶の実践であった。この講座を受けることは学生に対して、講師をロールモデルとして実習や授業態度における対人コミュニケーション能力の獲得TPOに即した態度の形成を向上させることに貢献したと考えられる
3. 担任学生への学生生活支援	2014年4月～2015年3月	1年生8名に対し、担任となり学生生活全般を指導した。年に2回、学習の進捗度、健康状態、履修状況、困り事の有無などを確認し、必要時指導を行ない、他教員とも協働、情報共有を行なった。
4. 担当学生への卒業論文の指導および国家試験勉強支援	2014年4月～2015年3月	5名の4年生の担当学生に対し、卒業論文の指導（文献検索方法、論文作成過程の説明、研究計画書の作成支援）を行なった。また、国家試験に対して、模試の結果を元に勉強方法や質問に対する助言、指導を行なった。
5. 担当学生への卒業論文の指導および国家試験勉強支援	2013年4月～2014年3月	2名の4年生の担当学生に対し、卒業論文の指導（文献検索方法、論文作成過程の説明、研究計画書の作成支援）を行なった。また、国家試験に対して、模試の結果を元に勉強方法や質問に対する助言、指導を行なった。
6. 親と子の心を支援できる人材育成教育の構築 —ホームページおよびe-learningの開発—	2008年04月～2009年02月	大阪大学現代的教育ニーズ取り組み支援プログラム「親と子の心を支援できる人材育成教育の構築」において、特任研究員として従事し、広く地域住民への情報提供のためにホームページを展開し、さらに、海外への情報発信のために英文の説明ページも追加した。E-learningについては、大阪大学で展開されている学習システムであるWebCTを使用して、すでに行なった講義や特別講演会の内容のビデオおよび教材を編集し、自宅外でも閲覧可能とした。
<b>2 作成した教科書、教材</b>		
1. 高齢者疑似体験演習の資料	2017年9月	老年看護学Ⅰの科目で使用する高齢者疑似体験演習の資料作成補助を行なった。高齢者の理解を促すために、実際にシニアポーズなどの補助用具を使用し、高齢者の抱えている困難さを体験してもらった。資料作成にあたっては、時間配分や演習内容を分かりやすさを重視できるように補助を行なった。
2. 老年看護における看護過程演習の資料	2017年6月	老年看護学Ⅱの演習科目である看護過程の展開をグループワーク形式で計5回の演習を主担として行なった。資料としては、実際に実習で使用する記録用紙を使用し、記載方法を含めて注意点を説明し、実習も円滑に記録が出来るような工夫を行なった。事例は一般的に高齢者に多くみられるケースとし、具体性をもって看護計画が立案できるような詳細な生活歴や趣味、入院の様子などを記載した。また、ケースを理解する際にそれまでに学習した病態生理を理解した上で、さらに加齢の一次変化を含めてアセスメントが行えるように資料を作成した。
3. 老年看護における看護過程に関する講義資料	2017年5月	老年看護Ⅱの科目で使用する老年看護における看護過程に関する講義資料を作成した。基本となる看護過程の流れを説明した上で、高齢者看護の特徴をどのように考慮して計画を立て、評価まで行なうかを学生の発言も取り入れつつ講義が進行できるように工夫して資料を作成した。
4. 高齢者疑似体験演習の資料	2016年10月	老年看護学Ⅰの科目で使用する高齢者疑似体験演習の資料作成補助を行なった。高齢者の理解を促すために、実際にシニアポーズなどの補助用具を使用し、高齢者の抱えている困難さを体験してもらった。資料作成にあたっては、時間配分や演習内容を分かりやすさを重視できるように補助を行なった。
5. クリニカルスタディ「実習で学ぼう！高齢者の退	2015年9月	高齢者の退院支援について、事例を用いて看護のポイント

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
<b>2 作成した教科書、教材</b>		
<p>院支援」</p> <p>6. 老年看護対象論：環境整備に関する講義資料</p> <p>7. 老年看護対象論：継続看護に関する講義資料</p> <p>8. ライフヒストリーからみた高齢者の理解演習の資料</p> <p>9. 大阪大学医学部保健学科看護学専攻3回生の在宅ケア論講義「テーマ：在宅ケアにおける介護の担い手としての介護者およびその性差について」</p> <p>10. 看護介入第2版NICから精選した43の看護介入</p> <p>11. 大阪大学医学部保健学科看護学専攻3回生の在宅ケア論講義「テーマ：大阪府東大阪市における居宅介護サービス利用にかかわるアンケート調査の概要」</p>	<p>2014年10月</p> <p>2014年10月</p> <p>2013年12月</p> <p>2004年5月19日、7月13日</p> <p>2004年07月</p> <p>2003年6月25日</p>	<p>トを示した。介護保険制度についても詳細に解説しているため、学部学生・大学院コースのテキストとして利用できる。 B5版、Clinical Study、36（10） 共著者：横島啓子、杉浦圭子 本人担当部分：p. 7-20</p> <p>2年次学生に対して、老年看護における環境整備の必要性や具体的な方法を視覚的に分かりやすい媒体を利用して講義を行なった。環境整備は高齢者に多く発生する転倒転落を予防するために重要な看護であり、視力や聴力が低下している高齢者の特徴を踏まえた環境を整えるためには実際に病院で行なわれている予防策などを紹介した。</p> <p>2年次学生に対して老年看護対象論において継続看護についての講義を行なった。高齢者は地域で生活して何らかの疾病に罹患し入院するが、何らかの障害を抱えたまま退院することも多く、退院後も看護は継続している。以上のことを念頭に置き、円滑な退院に向けての支援、退院後のフォローアップシステム（地域包括支援センターなどの地域資源）についての説明を行なった。介護保険システムも複雑であるため、学生の理解を促すための資料を工夫し、作成した。</p> <p>高齢者を理解する上で、ライフヒストリーに時代背景を組み合わせて考慮することは重要である。老年看護対象論において、生活や遊び、政治などに関する時代の流れをグループワークでまとめ、発表形式の演習を行なった。その際の資料はグループワークを円滑に進められるように工夫を行なった。</p> <p>在宅ケア論の講義（全15回）の1回のゲストスピーカーとして90分の講義を2回行った。講義内容は在宅ケアに必須である家族介護者の存在についてコンボイ・システムを用いて説明し、近年の家族介護者の続柄の変化を踏まえた上で、先に行ったインタビュー結果を元に特に男性介護者の特徴について説明した。同時に討議法についての説明も加え、学生同士でグループワークを行い、介護者の性差を踏まえた援助方法を考察、発表してもらった。</p> <p>看護介入に焦点を当てた学部・大学院コースのテキストとして利用できる。 B5版 全618頁 監訳：早川和生 訳者：加藤憲司、杉浦圭子、西田好江、村田加奈子、安間明日香、浅見恵梨子、中谷伸章、草野恵美子、九津見雅美、ほか31名 本人担当部分：16章「化学療法管理」、26章「遺伝子カウンセリング」の2章の翻訳を行った。具体的には16章では化学療法についての解説、副作用の説明および対処方法について紹介し、具体的事例を挙げて看護の実際について解説を行った。26章についても、同様に昨今の遺伝子技術についての情報提供および倫理的配慮を含めた遺伝子カウンセリング時の看護介入について紹介した。 掲載頁：16章P237-246、26章P354-P364</p> <p>在宅ケア論の講義（全15回）の1回のゲストスピーカーとして90分の講義を行った。講義内容は当該研究室で行っていた東大阪市における介護保険サービス利用者に対する3年連続の調査の結果をもとに、高齢者に対する施策である介護保険についての説明を行った。さらに、アンケートで得られた高齢者や介護者の意見を紹介し、サービスの受け手の意見を踏まえた、高齢者支援の今後を考察する機会の一助とすべく解説を加えた。</p>
<b>3 実務の経験を有する者についての特記事項</b>		
<p>1. 「武庫川女子大学×豊能町 健康まちづくり」第1回健康まちづくり</p> <p>2. 脳ネットサロン 「研究支援」</p> <p>3. 栄養科学研究所主催「ムコジョ・高齢1人暮らし応援フェスタ」における健康講話「認知症予防・コグニサイズ」講師</p>	<p>2017年6月</p> <p>2017年5月</p> <p>2017年3月</p>	<p>「武庫川女子大学×豊能町 健康まちづくり」の構成メンバーとして関わり、武庫川女子大学と豊能町の包括協定締結後、ときわ台の自治会と協力して、スポーツの専門家、理学療法士の講師を招聘し「自分の歩容を見てみよう」と題した健康講話をときわ台自治会館にて行った。構成メンバーとして、企画・調整に参加した。</p> <p>千里金蘭大学3号館会議室において、合計4名の実務看護師に対して対象者が持参した研究テーマや疑問、研究手法に関して助言などの支援を行った。対象者は学会発表も考えており、研究手法について学習を進めるとともに、学会発表に対するモチベーションも向上したことが伺えた</p> <p>武庫川女子大学栄養科学館にて行われた「ムコジョ・高齢1人暮らし応援フェスタ」にて健康講話として「認知症予防・コグニサイズ」を行なった。参加者17名、その他体力測定、食事会、懇談が開催された。健康講話を行うとともに、栄養学科の学生とともに高齢者との会話がスムーズに行く様にスーパーバイスを行った</p>

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
<b>3 実務の経験を有する者についての特記事項</b>		
4. 脳Know実践セミナー 「脳卒中患者の効果的なポジショニングの技」	2017年3月	千里金蘭大学1号館看護実習室にて脳卒中リハビリテーション看護認定看護師を招聘し、麻痺や硬直などを考慮したポジショニングの技術について講義、実践のセミナーを企画、開催した。参加者10名。このプログラムにおいて、事務局全般を担当し、広報、参加者受付、会計、会場整備、講演補助を行った。参加者は最前線の現場のポジショニング技術について学ぶとともに、実技を行うことで患者本位のポジショニングのあり方を実感したことが伺われた。
5. 脳Know実践セミナー 「身体と心にとどく癒しの看護技術」	2016年2月	千里金蘭大学1号館看護実習室にてアロマセラピーの専門家を招聘し、アロマハンドマッサージとリラクゼーションの実技のセミナーを企画、開催した。参加者23名。このプログラムにおいて、事務局全般を担当し、広報、参加者受付、会計、会場整備、講演補助を行った。参加者はハンドマッサージや漸進的筋弛緩法の実技を行い、その効果と方法を学習した。
6. 脳卒中ケア研究会シンポジウム 「高次脳機能障害を生きる人たちの支援を考える」	2016年11月	大阪府看護協会桃谷センターにて、脳卒中リハビリテーション認定看護師、高次脳障害支援センター支援コーディネーター、高次脳機能障害研究者招聘し、シンポジウムおよびディスカッションを行った。参加者114名。このプログラムにおいて、事務局全般を担当し、広報、参加者受付、会計、会場整備、講演補助を行った。講演後のアンケート内容から、高次脳機能障害への理解が深まり、症状への対処方法が分かったことで看護へのモチベーションが向上したことがうかがえた。
7. 脳卒中ケア研究会シンポジウム 「脳卒中看護に補完代替療法を取り入れる～急性期から在宅まで～」	2015年12月	千里金蘭大学3号館大会議室において補完代替療法に関する専門家（医師、看護師）を招聘し、シンポジウムおよびディスカッションを行った。参加者62名。このプログラムにおいて、事務局全般を担当し、広報、参加者受付、会計、会場整備、講演補助を行った。ディスカッションでは補完代替療法を積極的に取り入れたいという意見は少なかったものの、看護実践として看護師が行っていること自体の多くが補完代替療法の内容を含んでいることが再認識できたことが伺われた。
8. 脳卒中ケア研究会シンポジウム 「“食べる”というに関わるセラピーとケア」	2014年12月	千里金蘭大学3号館大会議室において言語聴覚士、歯科衛生士、摂食嚥下認定看護師を講師に招聘し、シンポジウムおよびディスカッションを行った。参加者96名。このプログラムにおいて、事務局全般を担当し、広報、参加者受付、会計、会場整備、講演補助を行った。講演後のアンケート内容から、看護師が嚥下や栄養に関してどのようにかわることが出来るかが理解できたことが伺えた。
9. 60歳以上を対象とした箕面シニア塾（箕面市より受託）	2014年11月	60歳以上を対象とした箕面シニア塾（箕面市より受託）の心身リフレッシュコースのうちの「認知症」に関する1講座を老年領域教員3名で担当。対象者に対して「人生履歴ノートを書いてみよう」のタイトルで心身面での自分の歴史を振り返り、今後の生活を構築することで、毎日の暮らしを健康に楽しく過ごすための知識を深め、体験する内容で行った。参加者約40名。
10. 関西リハビリテーション病院における老年看護に関する研修会	2014年10月～2014年12月	関西リハビリテーションにおいて、看護部研修の一環として老年看護についての研修会を老年領域教員3名で担当した。講義内容としては、「老年看護」の概要、「認知症」の概要について講義を行った。参加者は約30名。
11. 2008年度修士論文指導補助	2007年4月～2008年1月	テーマ「介護保険利用下の要介護者の居宅介護サービスに対する満足度の変化に関する検討」磯野亜理沙 研究室でおこなっている介護保険サービス利用に関する調査に携わっていたため、研究室に所属する介護保険サービスに関連する修士課程の大学院生に対して、研究計画書の書き方、文献レビューの方法、データ入力方法、分析方法、論文の執筆などに関して詳細に指導補助を実施した。
12. 地域看護学セミナー「テーマ：認知障害のみられる高齢者を介護する家族介護者の負担に関する研究」	2005年6月	認知障害のみられる高齢者の家族介護者について介護負担の観点から地域看護学講座の教員、院生、学生が参加する地域看護学セミナーで発表をおこなった。増加の一端をたどる認知症高齢者が在宅である場合、認知障害のない高齢者を介護するのは違い、問題行動などに由来する特有な負担感があると考え、尺度開発を試みた。介護者にとって要介護高齢者の予測不能な行動や介護者の言動を意図しないことはこと負担感を増大させていた。問題行動由来の介護負担感「精神的負荷」と「介護量の増大」に大別され、精神的負荷を伴う負担は要介護度3、4の中間の介護度の要介護者に特徴的であった。
13. 多変量解析勉強会の主催・指導的役割の遂行（参加者：修士の院生十数名）	2005年5月～2005年9月	博士課程3年時に、修士課程の院生を対象とした多変量解析に関する勉強会を全13回にわたり主催し、指導的役割を遂行した。 具体的な内容は、統計手法ごとに、保健学関連の英文中の当該手法を用いた原著論文を2本および日本語の分かりやすい解説がなされている原著論文1本を用い、紹介報告ならびに解説箇所の報告を分担してもらい、参加者自

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
<b>3 実務の経験を有する者についての特記事項</b>		
14. Causal analysis 勉強会	2005年4月～2005年7月	身に事前学習させ、モチベーションを高めるという方法をとった。参加者には単に内容や統計手法を紹介するだけでなく、自身が有するリサーチクエストンに対してどのような統計解析が有用であるかという視点で指導を行えたことは、量的研究を指導する際に役立つと考えられる。
15. 2006年度修士論文指導補助	2005年4月～2006年1月	量的研究における縦断データの分析手法の学習のため、CAUSAL ANALYSIS WITH PANEL DATA (STEVEN E. FINKEL著)の抄読会を博士課程の院生と所属講座の准教授と本人の3人で実施した。具体的な内容は上記著書を和訳し、縦断データを如何にして分析するのかという方法論を学ぶとともに、縦断データを用いた論文の紹介をおこなった。 テーマ「介護保険サービス利用者を対象とした『閉じこもり』と通所系サービス利用との関連の検討」 山北順子 テーマ「病院看護師による喫煙する患者への禁煙支援に関連する要因の検討」 矢山壮
16. 地域看護学セミナー「テーマ：認知障害のみられる高齢者を介護する家族介護者の負担に関する研究」	2005年06月07日	テーマ「在宅医療専門機関における在宅での看取りを実現する要因に関する研究—利用者の遺族を対象とする調査による検討—」 秋山明子 研究室でおこなっている「介護保険サービス利用に関する調査」および「大学におけるたばこ対策とその氷解に関する研究」に携わっており、リサーチアシスタントとして、研究室に所属する修士課程の大学院生に対して、研究計画書の書き方、文献レビューの方法、データ入力方法、分析方法、論文の執筆などに関して詳細に指導補助を実施した。
17. The quality of qualitative Research勉強会	2005年04月～2005年09月	認知障害のみられる高齢者の家族介護者について介護負担の視点から地域看護学講座の教員、院生、学生が参加する地域看護学セミナーで発表をおこなった。増加の一途をたどる認知症高齢者が在宅である場合、認知障害のない高齢者を介護するのは違い、問題行動などに由来する特有な負担感があると考え、尺度開発を試みた。介護者にとって要介護高齢者の予測不能な行動や介護者の言動を意理解しないことはこと負担感を増大させていた。問題行動由来の介護負担感には「精神的負荷」と「介護量の増大」に大別され、精神的負荷を伴う負担は要介護度3、4の中間の介護度の要介護者に特徴的であった。
18. 2004年度修士論文指導補助	2003年4月～2004年1月	質的研究の考え方、どのような研究がなされてきたか、というThe quality of qualitative Research (Clive Seale著)を所属講座の修士課程の大学院生とともに抄読会をおこなった。看護研究において質的研究は重要であり、その方法論を自分たちで学んだことは今後の看護教育において活用できると考えられる。 テーマ「看護学生の非喫煙継続への意思に影響する要因の検討」 谷川緑 研究室でおこなっている「大学におけるたばこ対策とその評価に関する研究」の調査に携わっていたため、研究室に所属するそのデータを使用した修士論文を作成する際の学生に対して、データ入力方法、分析方法、論文の執筆方法などに関して指導補助を実施した。
<b>4 その他</b>		
1. 大阪大学現代的教育ニーズ取り組み支援プログラム（現代GP）「親と子の心を支援できる人材育成教育の構築」における講演会開催補助、報告書作成等業務	2007年4月～2009年3月	当該プログラムに特任研究員として従事し、ホームページ作成補助、e-learning施行補助および評価、学生評価アンケート分析、講演会開催補助、報告書作成などを行った。本活動により、軽度発達障害や親子関係など家族看護学に関する知識が深められた。さらに現代GPには、大阪大学の教授、准教授さらには地域で活動する親の会やこどものこころの分子統御研究センターなど多職種の人員が関わっており、その中の大学教育のあり方を考察する一助となったと考えられる。

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
<b>1 資格、免許</b>		
1. 保健師	1993年	登録番号：第73631号 老年看護学においては、個別的な臨床看護の視点だけではなく、家族や在宅生活を営むことを視野に含めた地域看護の展開、制度利用の視点が必要である。その際に保健師の資格は必須であると考えられる
2. 養護教諭1種	1993年	登録番号：平四 養一 第29号 養護教諭は主として学校保健を担う資格であるが、ノーマライゼーションの普及とともに分野を問わず多様な看護対象に対して養護教諭の視点から捉えるという考え方も看護教育にも取り入れていきたい
3. 看護師	1992年	登録番号：第755314号

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
<b>1 資格、免許</b>		
		教育研究分野が老年看護であるため、日常の教育活動には必須である
<b>2 特許等</b>		
<b>3 実務の経験を有する者についての特記事項</b>		
1. 第19回日本母性看護学会学術集会 協力委員	2017年6月	武庫川女子大学にて行われた第19回日本母性看護学会学術集会に協力委員として参加・協力し、当日は救護、本部委員として業務を行った
2. 兵庫県立宝塚高校 特別授業「看護とケア」講師	2017年4月～2018年2月	全40回のうち、8回分を担当。主に、看護師になる方法や基礎学力の必要性、食事介助の必要性や高齢者の理解などを高校生に理解できる内容で教授した
3. 第48回日本看護学会—慢性期看護—学術集会 抄録選考委員	2017年4月	抄録選考委員として、計13本の抄録を査読し、再修正された抄録に対しても再査読を行った。
4. 看護系大学入試説明会への出務	2017年4月	大阪市梅田で行なわれた入試説明会に出務し、進学希望者および保護者に対して看護学科のカリキュラムや本大学の特色、入試に関する情報などを説明した
5. 看護系大学入試説明会への出務	2016年6月	兵庫県姫路市で行なわれた入試説明会に出務し、進学希望者および保護者に対して看護学科のカリキュラムや本大学の特色、入試に関する情報などを説明した
6. 看護学部看護学科パンフレットの作成	2016年4月～現在	本学の看護学部看護学科の特徴を入学希望者等に向けて、パンフレット制作業者との調整を重ね、学科パンフレットを作成した。作成の際には、購読層の年齢や背景を念頭に置き、ニードにあった見やすさと分かりやすさを工夫した。
7. 大学入学試験監督業務	2016年11月～2017年2月	本大学の公募推薦、一般入試の入学試験監督業務を行なった。
8. 看護系大学入試説明会への出務	2015年7月	大阪市梅田で行なわれた入試説明会に出務し、進学希望者および保護者に対して看護学科のカリキュラムや本大学の特色、入試に関する情報などを説明した。
9. 医療法人甲友会西宮協立脳神経外科病院 院内研究指導	2015年4月～2017年5月	当該病院の主に看護職に対して、院内研究に関する内容や研究方法、データ分析方法の相談、示唆、学会発表の予演・指導などの研究支援を行っている
10. オープンキャンパス運営補助	2015年4月～現在	学部内広報入試委員として、オープンキャンパスの運営にかかわる業務を行っている。会場設営、学生スタッフや担当教員の対応、急病人などの介抱、その他質問などへの対応などを行っている。
11. オープンキャンパスでの実習室企画の運営	2015年4月～2017年3月	老年看護学分野として、オープンキャンパスにて実習室を使用して高齢者疑似体験、ソフト食の試食、昔遊びなどの体験型のイベントを企画し、実行した。参加者に対して、高齢者看護の特徴や必要性、また本学における教育の特徴などの理解を促した。
12. 体育祭応援合戦参加に関する学生支援	2015年4月～2015年5月	学部内学生委員として、体育祭応援合戦参加の学生支援を行なった。応援合戦参加に関して、学生の物品購入の方法やグループとして成果物を作り上げていく家庭を支援した。結果として新人賞を獲得した。
13. 大学入試の試験監督業務	2015年11月～2016年2月	本大学の公募推薦、一般入試およびセンター試験の入学試験監督業務を行なった。
14. オープンキャンパスの実習室企画運営	2013年4月～2015年3月	老年看護学領域として、オープンキャンパスにて実習室を使用して高齢者疑似体験、ソフト食の試食などの体験型のイベントを企画し、実行した。参加者に対して、高齢者看護の特徴や必要性、また当該大学における教育の特徴などの理解を促した。
15. 第33回日本看護科学学会学術集会 査読委員	2013年4月	大阪国際会議場にて行われた第33回日本看護科学学会学術集会の査読委員として計10本の抄録査読を行った。
16. 大阪大学現代的教育ニーズ取組支援プログラム 平成20年度報告書Ⅲ	2009年3月	当該プログラムに特任研究員として従事し、ホームページ作成補助、e-learning施行補助および評価、学生評価アンケート分析を行い報告書を作成した。 共著者：阿曾洋子、藤原千恵子、永井利三郎、伊藤美樹子、新田紀江、遠藤淑美、酒井佐枝子、新家一輝、奥野裕子、杉浦圭子、横川しのぶ、高間さとみ、荒瀬幸、荒木田美香子
17. 東大阪市における居宅介護サービス利用者3年縦断アンケート調査報告書	2007年3月	2003年7月～2005年11月にかけて行われた東大阪市における5000件の介護保険サービス利用者に対する縦断調査の報告書である。本調査を主担当者として遂行し、東大阪市との折衝も行った。要介護高齢者、介護者の特性、サービス利用に関する状況などについて、縦断的に分析し、報告した。研究の立案・調査の実施・データ入力作業、分析、結果の考察、報告書の作成の全般にわたりほぼ全ての作業を遂行した 共著者：三上洋、伊藤美樹子、杉浦圭子、九津見雅美
18. 東大阪市における居宅介護サービス利用状況に関する調査報告書	2004年3月～2009年3月	本調査を主担当者として遂行し、東大阪市との折衝も行った。要介護高齢者、介護者の特性、サービス利用に関する状況、在宅介護サービスや介護保険制度についての自由記述に関する分析を担当した。研究の立案・調査の

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
<b>3 実務の経験を有する者についての特記事項</b>		
19. 東大阪市における居宅介護サービス利用状況に関する調査報告書	2003年3月	実施・データ入力作業、分析、結果の考察、報告書の作成の全般にわたりほぼ全ての作業を遂行した 共著者：三上洋、伊藤美樹子、杉浦圭子、九津見雅美、大角和、丸谷祐子、秋山明子、小野木麻里、日吉和子、山北順子、山田綾、矢山壮 本調査に研究メンバーの一員として参加した。要介護高齢者、介護者の特性、サービス利用に関する状況、在宅介護サービスや介護保険制度についての自由記述に関する分析を担当した。研究の立案・調査の実施・データ入力作業、分析、結果の考察、報告書の作成の全般にわたりほぼ全ての作業を遂行した。 共著者：三上洋、伊藤美樹子、足立登志子、九津見雅美、杉浦圭子、仲下祐美子、谷川緑、山平優子
20. 大学におけるたばこ対策とその評価に関する研究 —保健医療系大学生の喫煙行動とたばこに対する態度に関する実態調査—	2003年3月	厚生科学研究費補助金健康科学総合研究事業「地域におけるたばこ対策とその評価に関する研究」(主任研究者 大阪府立成人病センター 大島明 調査部長)分担研究平成14年度報告書 本調査は厚生科学研究費の研究の分担研究として所属研究室で行われた。本調査に研究メンバーとして参加し、大阪大学の学生に対して喫煙に関するアンケート調査を行い、研究の立案・調査の実施・データ入力作業、分析、結果の考察、報告書の作成の全般にわたりほぼ全ての作業を遂行した。 共著者：三上洋、有馬志津子、足立登志子、九津見雅美、杉浦圭子、仲下祐美子、谷川緑、山平優子
21. 東大阪市における居宅介護サービス利用状況に関する調査報告書	2002年3月	大阪府東大阪市と大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻三上研究室との間で締結された居宅介護サービス利用に関する調査である。研究の立案・調査の実施・データ入力作業、分析、結果の考察、報告書の作成の全般にわたりほぼ全ての作業を遂行した。 共著者：三上洋、伊藤美樹子、足立登志子、九津見雅美、杉浦圭子、仲下祐美子、林知里
22. 東大阪市における居宅介護サービスの未利用に関する調査報告書	2002年3月	本調査は介護保険利用者の調査と対応した調査である。ここでは要介護認定を受けていながら、サービスを利用していないものを対象とした。主に要介護高齢者の特性、サービス未利用に関する状況、在宅介護サービスや介護保険制度についての自由記述に関する分析をした。研究の立案・調査の実施・データ入力作業、分析、結果の考察、報告書の作成の全般にわたりほぼ全ての作業を遂行した。 共著者：三上洋、伊藤美樹子、足立登志子、九津見雅美、杉浦圭子、仲下祐美子
23. 大学におけるたばこ対策とその評価に関する研究報告書	2002年3月	本調査は厚生科学研究費の研究の分担研究として所属研究室で行われた。本調査に研究メンバーとして参加し、大阪大学の学生に対して喫煙に関するアンケート調査を行い、研究の立案・調査の実施・データ入力作業、分析、結果の考察、報告書の作成の全般にわたりほぼ全ての作業を遂行した。 共著者：三上洋、有馬志津子、足立登志子、九津見雅美、杉浦圭子、仲下祐美子、谷川緑
<b>4 その他</b>		
1. 引用実績：Gender differences in spousal caregiving in Japan (共著、筆頭論文) Journals of Gerontology, series b: SOCIAL SCIENCES, Vol. 64B(1), 147-156, 2009	2016年4月	岩田 昇ほか (2016), 要介護者の性別および家族介護者の続柄別に見る在宅介護の評価、対処方略および生活への影響の相違, 日本公衆衛生雑誌, 63(4), 179-189
2. 引用実績：在宅介護継続配偶者介護者における介護経験と精神的健康状態との因果関係の性差の検討 (共著、筆頭論文) 日本公衆衛生雑誌, Vol. 57(1), 3-16, 2010	2016年4月	岩田 昇ほか (2016), 要介護者の性別および家族介護者の続柄別に見る在宅介護の評価、対処方略および生活への影響の相違, 日本公衆衛生雑誌, 63(4), 179-189
3. 引用実績：家族介護者における在宅認知症高齢者の問題行動由来の介護負担の特性 (共著、筆頭論文) 日本老年医学会雑誌, 44(6), 717-725, 2007	2009年9月～2010年9月	左記の論文を以下の計2件の論文で引用された。 横瀬 利枝子(2009), 介護施設利用に到るプロセスへの一考察：認知症の母親と娘の関係性の視点から, 生命倫理, 19(1), 60-70 横瀬 利枝子(2010), 介護施設利用に到るまで：認知症の母親への息子の対応, 生命倫理, 20(1), 76-84
4. 2008年度大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻優秀論文賞(教員の部)	2009年2月	「Gender differences in spousal caregiving in Japan」Journals of Gerontology, series b: SOCIAL SCIENCE S, 64B, 147-156, 2009に掲載された論文(筆頭論文)にて、大阪大学現代GP特任研究員にて従事している際に受賞した。海外に広く日本の介護者の性差に関する事象を広めることができたとともに、受賞することで研究室全体の研究へのモチベーションを高めることができたと考えられる。
5. 引用実績：在宅介護の状況および介護ストレスに関する介護者の性差の検討 (共著、筆頭論文) 日本公衆衛生雑誌, 51, 240-251, 2004	2005年5月～2016年4月	左記の論文を以下の論文の他計8件の論文で引用された。 深堀 浩樹ほか(2005), 特別養護老人ホーム入所者の家族介護者における精神的健康とその関連要因, 日本公衆衛生雑誌, 52(5), 399-410

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
4 その他		
		<p>木村 誠子ほか(2007), 特別養護老人ホーム入所高齢者の家族介護者におけるQOLとその関連要因 : SF-36による検討, 老年看護学 : 日本老年看護学会誌, 12(1), 94-100</p> <p>星野 純子ほか(2009), 女性介護者における心身の健康的特性, 日本公衆衛生雑誌, 56(2), 75-86</p> <p>MURAYAMA Hiroshiほか(2011), Is sekentei associated with attitudes toward use of care services? : Multi level analysis in Japan, Geriatrics &amp; gerontology international 11(2), 166-173</p> <p>岩田 昇ほか (2016), 要介護者の性別および家族介護者の続柄別に見る在宅介護の評価、対処方略および生活への影響の相違, 日本公衆衛生雑誌, 63(4), 179-189</p>

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要

1 著書				
1. 看護介入第2版NICから精選した43の看護介入	共	2004年07月	医学書院	<p>監訳：早川和生 訳者：加藤憲司、杉浦圭子、西田好江、村田加奈子、安間明日香、浅見恵梨花、中谷伸章、草野恵美子、九津見雅美、ほか31名 本人担当部分：16章「化学療法管理」、26章「遺伝子カウンセリング」の2章の翻訳を行った。具体的には16章では化学療法についての解説、副作用の説明および対処方法について紹介し、具体的事例を挙げて看護の実際について解説を行った。26章についても、同様に昨今の遺伝子技術についての情報提供および倫理的配慮を含めた遺伝子カウンセリング時の看護介入について紹介した。</p> <p>掲載頁：16章P237-246、26章P354-P364</p>

2 学位論文				
1. 在宅介護者の介護経験および精神的健康に関する性差	単	2008年12月	大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻看護学領域	<p>本邦の在宅介護状況における介護者の性別の特徴および介護経験の介護者の精神的健康に及ぼす影響を明らかにするべく博士論文を作成した。男性介護者に対しては、介護開始初期の段階で家事・身体介護に関するサービスを導入し、生活そのものを安定させる支援が重要であると考えられる。また、副介護者が得られにくい環境が閉鎖的な介護環境を憎悪させてしまう可能性が示唆され、そのための支援が重要である。一方、女性介護者は、男性介護者よりも介護負担感、うつ症状の精神的健康は悪く、うつ症状の悪化は気分転換型対処方略を抑制する可能性が示唆された。デイケア・デイサービスなどのレスパトサポートで気分転換が行いやすいような環境づくりが必要であると考えられた。</p>
2. 介護保険サービス利用者の家族介護者のストレスプロセスモデルにおける性差の検討	単	2003年01月	大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻看護学領域	<p>近年増加する男性介護者の現状を踏まえ、介護者研究で多く適用されているストレスプロセスモデルを応用し、介護の内容や介護ストレスの程度における介護者の性差を明らかにすることを目的に研究を行った。共分散構造分析等の結果、女性介護者は男性介護者より高齢で認知障害の強い要介護者を介護しており、介護を行う時間は長く、家事に関連した介護を多く行っていた。さらに、女性介護者のほうが介護負担感が高く、うつ状態であった。男性介護者は女性介護者よりホームヘルプの利用頻度が高かった。</p>

3 学術論文				
1. Declining oral functioning's effects on the frequency of leaving one's home: examining individuals living in the community who require minor nursing support (査読付)	共	2018年2月刊行予定	日本健康医学会雑誌、第26巻第4号 (短報)	<p>本研究では、デイサービスに通所していた地域在住軽度要介護者616件に対し、口腔機能の閉じこもりの指標となる外出頻度の低下に対する影響を検討した。対象者は要介護度が低く、比較的自立度の高い集団であったが、咀嚼機能や嚥下機能の低下が半数近く自覚されていた。また、口腔機能の低下と外出頻度の低下が関連していた。さらに、ロジスティック回帰分析の結果から口腔機能低下の中でも特に咀嚼機能の低下を防ぐことで閉じこもりを予防できる可能性があることが示されたと考えられる。</p> <p>共著者：Keiko Sugiura、Keiko Yokojima、Chisato Hayashi</p>
2. Gender Differences in Occupational Career Assessments and Professional Identities of Nurses (査読付)	共	2017年2月	武庫川女子大学看護学ジャーナル、Vol.2, 83-91 (研究報告)	<p>本研究では男性看護師が増加してきている状況を踏まえ、職業アイデンティティや職務キャリアに関する項目の性差を検討することを目的とした。病院の看護師229名を分析した結果、職業アイデンティティ</p>

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>3 学術論文</b>				
3. 看護技術教育のための模擬患者（Simulated Patient: SP）養成の実際(査読付)	共	2015年12月	千里金蘭大学紀要, Vol.12, 151-160 (研究報告)	<p>の認識では、女性の方が男性より有意に得点が高く、職務キャリアでは、男性の方が女性より有意に得点が高かった。女性は男性より看護師としての業務をアイデンティティとして受容している一方で男性では看護師という職種を“職業”として捉えている側面が強いことが明らかになった。</p> <p>共著者：Keiko Sugiura、Naoko Kinoshita、Mineko Kiyota、Akinori Okayama</p> <p>平成24年度に千里金蘭大学の公開講座として看護学部基礎看護学分野が主催した「看護学生と学ぶ模擬患者養成講座」の実際を報告した。受講生は3名であり、現役SPが講師を務め、全6回の講義、ディスカッションを行った。参加した看護学生は計8名だった。講義内容は講義、学内演習、相互ディスカッションであった。講座について効果的であったのは受講者の自信を高めるフィードバックの存在であり、受講者は回を重ねるごとに変化し、最終的にはSPとしての自覚に目覚めていった。また、中高年層の社会貢献活動の一端を担っているとも考えられた。本研究では、共著者として研究の立案・調査の実施・結果の考察・文献の調査・論文の作成の全般にわたり、助言などを行った。</p> <p>共著者：山本直美、伊藤朗子、富澤理恵、山本純子、梅川奈々、杉浦圭子、久米弥寿子</p>
4. Association between subjective memory complains and impaired higher-level functional capacity in people aged 60 years or older(査読付)	共	2015年1月	Archives of Gerontology and Geriatrics, Vol.1.60, 201-205, (原著論文)	<p>要介護高齢者において認知機能に関する主訴と身体的機能との関連性を明らかにすることを目的とし、616件の60歳以上の地域在住の高齢者を対象に、年齢、性別、老研式活動能力指標（身体機能）、認知機能、GDS等を調査項目として自記式質問紙調査を行った。身体機能を従属変数とし、多重ロジスティック回帰分析を行った。結果として女性では、年齢、うつ症状を制御した状態でも、認知機能低下の程度は身体機能に影響していた（OR=3.36、95%CI:1.59-7.08）。男性においては、関連性はみられなかった。本研究では、共著者として研究の立案・調査の実施・結果の考察・文献の調査・論文の作成の全般にわたり、助言などを行った。</p> <p>著作者：尾形宗士郎、林知里、杉浦圭子、早川和生</p>
5. 在宅介護継続配偶者介護者における介護経験と精神的健康状態との因果関係の性差の検討(査読付)	共	2010年01月	日本公衆衛生雑誌, Vol.57(1), 3-16 (原著論文)	<p>配偶者介護において介護者を取りまく状況と、介護保険サービス利用回数、介護者の対処方略などの介護経験の経年的な変化と介護者の精神的健康状態との因果関係における性別の特徴を明らかにすることを目的とした。分析は交差遅れ効果モデル（Cross-lagged effect model）を用いた共分散構造分析による多母集団同時分析を行った。夫は2年という時間の経過とともに徐々に介護役割に適応し、ADL介護量や副介護者などの身近なサポートを増加させる傾向がみられた。妻介護者はサービス利用量を増加させていたが精神的健康状態とは関連がなく、かつ介護肯定感の低下がみられた。</p> <p>著作者：杉浦圭子、伊藤美樹子、九津見雅美、三上洋</p>
6. Management of behavioral and psychological symptoms of dementia in long-term care facilities in Japan(査読付)	共	2009年12月	Psychogeriatrics: the official journal of the Japanese Psychogeriatric Society 9(4), 186-195 (原著論文)	<p>情動-行動共感マネジメントと受容-支援マネジメントが望ましいのが、徘徊、不平不満、夜中起き出す、暴言、介護拒否、帰宅要求、情動-行動共感マネジメントが望ましいのが、いやらしいことを言う、受容-支援マネジメントが望ましいのが異食、情動-行動共感・受容-支援・回避/関与レベル低減マネジメントの3つが望ましいのが収集癖であった。負担度の最も高かった暴力や、同じ事を何度も言う、不潔行為、物盗られ妄想の4つに関する負担度の低いマネジメントは明らかとならなかったことからこれらに対してケアスタッフは試行錯誤していることが示唆された。本研究では、</p> <p>共著者として研究の立案・調査の実施・結果の考察・文献の調査・論文の作成の全般にわたり、助言などを行った。</p> <p>著作者：九津見雅美、伊藤美樹子、杉浦圭子、三上洋</p>
7. ホームヘルパーの仕事意欲測定尺度開発およびその要因(査読付)	共	2009年02月	日本公衆衛生雑誌, Vol.56(2), 87-100 (原著論文)	<p>超高齢社会の到来に伴い、在宅福祉の要とされているホームヘルプサービスを担っているホームヘルパーの仕事意欲測定尺度を作成し、さらにその仕事意欲に影響する要因を明らかにすることを目的とした。834人のホームヘルパーに調査した結果、仕事意欲測定尺度は「現状肯定感」と「向上志向」により構成され、現状肯定感には利用者との関係やプロとしての技能を高められる環境、給料に満足していることが有意に正の影響を与え、向上志向には、利用者との関係や生活全般に満足していることが有意に正の影響を与えていた。本研究では、共著者として研究</p>

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>3 学術論文</b>				
8. Gender differences in spousal caregiving in Japan(査読付)	共	2009年01月	Journals of Gerontology, series b: SOCIAL SCIENCES, Vol.64B(1), 147-156 (原著論文)	<p>の立案・調査の実施・結果の考察・文献の調査・論文の作成の全般にわたり、助言などを行った。</p> <p>著作者：中谷安寿、杉浦圭子、三上洋</p> <p>本邦においては、介護者の性差を検討した先行研究はほとんどない。そこで、本研究では介護保険サービス利用者の介護者のうち配偶者介護者に着目し、介護者の精神的健康状態に対する関連要因の性差の検討を行った。分析は共分散構造分析による多母集団同時分析を行った。夫介護者では子世代と同居していない、ADL介護提供量が多い、介護期間が短い、介護役割を積極的に受容することは、うつ症状の得点の高さと関連がみられた。妻介護者では要介護者の認知障害が重症である、副介護者がいないことがうつ症状の得点の高さと関連がみられたが、夫介護者との有意差はみられなかった。</p>
9. 施設入所認知症高齢者にみられるBPSD (Behavioral and Psychological Symptoms of Dementia)とケアとの関係(査読付)	共	2008年03月	大阪大学看護学雑誌, Vol.14(1), 1-10	<p>著作者：杉浦圭子、九津見雅美、伊藤美樹子、三上洋</p> <p>施設入所認知症高齢者にみられるBPSDに対して提供されているケアの特徴や傾向を把握することを目的とした。ケアスタッフ275人を調査した結果、多重対応分析において、ケアの特徴として接近型「行動を共にする」「安心感を与える」ケアが布置したが、「身体拘束」や「叱責」という人権擁護の観点から好ましくないケアも布置された。本研究では、共著者として研究の立案・調査の実施・結果の考察・文献の調査・論文の作成の全般にわたり、助言などを行った。</p>
10. 家族介護者における在宅認知症高齢者の問題行動由来の介護負担の特性(査読付)	共	2007年11月	日本老年医学会雑誌, 44(6), 717-725	<p>著作者：九津見雅美、伊藤美樹子、杉浦圭子、三上洋</p> <p>在宅認知症高齢者の問題行動に由来する特有の介護者負担に着目し、従来の尺度とは異なる視点から新たに介護負担感(Caregiver's Burden caused by Behavioral and psychological symptoms of Dementia: CBBB、以下CBBBと略す)を評価する項目を作成し、高齢者の介護者全般を対象にした大規模サンプルを用いて測定した上で、CBBBの特性を統計学的に明らかにすることを目的とした。CBBBは要介護者の認知障害に対する感度が高く、問題行動に由来する介護者の心理的な緊張や圧迫などの負担をより詳細に表現することができるため、介護者に対する援助の際の支援ニーズの把握に利用可能であると考えられる。</p>
11. 障害高齢者の家族介護者の1年後の精神的ストレスの変化にかかわる介護保険サービス利用の検討	共	2005年06月	大阪ガスグループ福祉財団研究調査報告書, Vol.18, 105-113	<p>著作者：杉浦圭子、伊藤美樹子、三上洋</p> <p>介護保険サービスホームヘルプ、デイケア、デイサービス、ショートステイ、訪問看護の利用頻度が介護負担や抑うつなどのストレスを悪化させず、介護肯定感の様なポジティブ感情を高めることができるかを明らかにすることを目的とした最終的な分析対象者は748人であった。低要介護度群において、訪問看護を積極的に利用することは介護負担感の悪化を予防すること、低要介護度や要介護者に認知障害がある場合、ホームヘルプを積極的に利用することは介護肯定感を高めることができる可能性があることが示唆された。</p>
12. 介護老人保健施設入所者の退所先とその関連要因の検討	共	2005年01月	ジェロントロジーニューホライズン, 17(1) 95-102	<p>著作者：杉浦圭子、伊藤美樹子、三上洋</p> <p>介護老人保健施設の入所者の退所先とその関連要因を把握することを目的とした。家庭復帰の割合は年々減少し、各年度とも老健への退所割合が最も多かった。自宅外退所に関連していたのは認知症高齢者自立度と、老老世帯であること、子世代と同居していることであった。認知症が重度であること、老老世帯であることは自宅外退所に、子世代との同居世帯であることは自宅退所に関連していた。共同研究であり、研究の立案・調査の実施・結果の考察・文献の調査・論文の作成の全般にわたり、助言などを行った。</p>
13. 在宅介護保険利用高齢者の生活満足度を規定する要因の検討	共	2004年11月	第63回日本公衆衛生学会(松江)	<p>著作者：九津見雅美、岡村ひとみ、高田晴美、中村香奈、西本美香、原本広子、杉浦圭子、三上洋</p> <p>大阪府東大阪市に在住する介護保険サービス利用者のうち2864名を対象に、介護保険の諸サービスを利用し在宅で生活している高齢者の生活満足度と介護度等との関連を明らかにすることを目的とした調査を行った。本研究では、共著者として研究の立案・調査の実施・結果の考察・文献の調査・論文の作成の全般にわたり、助言などを行った。</p>

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>3 学術論文</b>				
14. 在宅介護の状況および介護ストレスに関する介護者の性差の検討(査読付)	共	2004年04月	日本公衆衛生雑誌, Vol.51, 240-251 (原著論文)	共著者：文鐘聲、杉浦圭子、九津見雅美、伊藤美樹子、三上洋 介護者の在宅介護の状況および介護ストレスの性差を明らかにし、特徴を明確化することを目的とした。大阪府東大阪市にて無記名自記式質問紙による調査を行い、868組の要介護者と介護者を分析対象とした。男性介護者の割合は27.1%であった。結果から、在宅介護の状況および介護ストレスについて、男性介護者と女性介護者では要介護者の状況や介護量、ストレス対処方略などに多くの違いがみられることが明らかとなった。今後、性差を考慮した援助の展開が必要であると考えられる。 著作者：杉浦圭子、伊藤美樹子、三上洋
<b>その他</b>				
<b>1. 学会ゲストスピーカー</b>				
<b>2. 学会発表</b>				
1. 独居高齢者のライフログを用いた健康度と認知機能評価 (第2報)	共	2017年8月	日本看護研究学会第43回学術集会 (名古屋)	本研究では高齢者が1日の自分の生活や感情、身体状況を簡便に記録することが、認知機能の向上につながるができるか検討することを目的とし、独居高齢者13名を対象に自宅でのバーコード読み取り機器を使用しライフログの調査を各自2~3週間ずつ行った。認知機能の評価は、初回来校時にMMSE、FABを測定し、集中力の評価として、LEDスイッチボックスを用いたランダム測定を、ライフログ前後に実施した。MMSE等の結果では対象者の認知機能は正常であった。ランダム測定の検査では、13人中7名がライフログ実施後の方がボタン押しの時間が早くなっていた有意にライフログ後の時間の短縮が見られた。セルフモニタリングなど日常生活に関係深い言葉や行動を記録することは、認知症の予防として有効な手段であり、バーコード操作に集中することが、認知機能のひとつである集中力の向上に繋がることが示唆された。 共著者：横島啓子、杉浦圭子、久山かおる
2. 独居高齢者のライフログを用いた健康度と認知機能評価 (第1報)	共	2017年8月	日本看護研究学会第43回学術集会 (名古屋)	本研究では、簡便な機器を利用して独居高齢者の生活パターンや行動特性をできるだけ正確に把握し、心身の健康度との関連性を明らかにすることを目的とした。独居高齢者13名 (女性10名、男性3名、平均年齢75.3歳) を対象に自宅でのバーコード読み取り機器を使用した調査を各自約2~3週間ずつ行った。初回の説明時に質問紙調査にて基本的属性、既往歴、包括的健康度尺度SF-36v2による心身の健康度を尋ねた。生活パターンをみると対象者の生活時間は起床・就寝時間は週間を通してほぼ一定であり、睡眠時間はおおよそ6~7時間で、週に1度未満の外出頻度の者はいなかった。心身の健康度との関連をみると既往歴など基礎疾患の存在は健康度と関連が深く、生活時間のばらつき、運動習慣なしという様な行動特性とも関連がある可能性があることが示唆された。 共著者：杉浦圭子、横島啓子、久山かおる
3. 地域在住独居高齢者の生活パターンおよび心身の状況の実態	共	2017年6月	第22回日本老年看護学会学術集会 (名古屋)	本研究では独居高齢者を援助するにあたり、本人の生活パターンやそれに伴う心身の状況を把握することは健康課題の解決の基盤として重要であると考え、正確に経時的に実態を把握することを目的とした。独居高齢者13名 (平均年齢75.3歳) を対象に自宅でのバーコード読み取り機器を使用した調査を各自約2週間ずつ行った。対象者の生活時間は期間中、起床・就寝時間は1週間を通してほぼ一定であった。ネガティブ感情を表出した者は10名でその内容は「疲れた」が最も多かった。個別的にみると、痛み等の身体不調と「あせる・切ない」と連動して朝方多く訴えるものや旅行や会合後「楽しい」という気持ちと一緒に「疲れた」と表出する者がいた。寂しい・不眠という訴えも2名にみられた。全体の体調の悪さの訴えは7名にみられ、夕方から就寝前に多かった。 共著者：杉浦圭子、横島啓子、久山かおる、岩崎幸恵
4. 独居高齢者を対象としたライフログを用いた認知機能向上への試み	共	2017年12月	第37回日本看護科学学会学術集会 (仙台)	本研究では1日の自分の生活や感情、身体状況を簡便に記録することが、認知機能の向上につながるかを検討することとした。2016年10月~12月にライフログの調査を各自約2~3週間ずつ行い、認知機能評価はMMSE、FABを測定とともにLEDスイッチボックス

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>2. 学会発表</b>				
5. 脳卒中リハビリテーション看護認定看護師の活動への他職種の認識	共	2017年12月	第37回日本看護科学学会学術集会（仙台）	<p>を用いた記憶誘導性順序課題を20回施行した。独居高齢者13名、平均年齢75.3歳であった。MMSEおよびFABの得点はそれぞれ正常範囲内であり、対象者の認知機能は正常であった。記憶誘導性順序課題では、13人中12名がライブログ実施後の方が測定所要時間が有意に早くなっていた。本調査により対象者は自身の生活等を振り返ることができ、記録の際には、正確な機器の操作が求められた。認知機能と運動機能の両方を刺激することになったことが、順序課題における結果に結びついたものと思われる。本研究ではデータ収集を含め、ほぼ全ての作業を遂行した。</p> <p>共著者：横島啓子、杉浦圭子、久山かおる</p> <p>本研究では、認定看護師活動に関係する他職種の認識から、各々が期待する脳卒中リハビリテーション看護認定看護師（以下、認定看護師と略す）像を明らかにすることを目的とし、2015～2016年に認定看護師と同病院のリハビリスタッフ6名、医師6名に認定看護師の活動に関する半構造的面接を行なった。得られたデータにてテキストマイニング分析を実施した。認定看護師活動に関係する他職種の認識を職種別にみると、リハビリスタッフは認定看護師の患者や家族への直接的な看護実践に着目し、セラピストとの連携に関する発言がみられることが特徴的であったが、医師は認定看護師の知識量の多さなどを評価し、チーム医療の一員や診療のサポート役としての役割を期待している傾向がみられた。本研究ではデータ収集を含め、ほぼ全ての作業を遂行した。</p>
6. 「高齢者お一人暮らしスタートアップ事業」における対象者の特徴	単	2016年8月	第75回日本公衆衛生学会（大阪）	<p>共著者：杉浦圭子、山本直美、登喜和江、日坂ゆかり、山居輝美、岩佐美香、山添幸</p> <p>本研究では「高齢者お一人暮らしスタートアップ事業」について報告するとともに、参加者の特徴を明らかにし、今後の支援方法について検討するための一助とすることを目的とした。参加者は11名であり、イベントでは体力測定、健康講話、昼食会、レクリエーションを行い、独居に至った理由など質問紙調査も行なった。対象の平均年齢は78.2歳で独居になった理由は配偶者の死亡が8名、1名は離婚、2名は無回答だった。2名が日常生活に何らかの介助を必要とし、自覚する健康状態も「良くない、やや良くない」との回答していた。体力測定の結果では、開眼片足立ちで15秒未満のものが6名存在し、筋力が低下していると自覚している者は1名であった。現時点での健康状態に緊急性はなかったが、運動器症候群の疑いのある者も存在し今後もモニタリングを継続の必要性が示唆された。</p>
7. テキストマイニング分析による高齢者夫婦世帯の居宅介護サービスに関する満足感と介護困難の実態	共	2016年8月	日本看護研究学会第42回学術集会（茨城）	<p>共著者：杉浦圭子</p> <p>本研究では高齢者夫婦世帯の居宅介護サービスに関する満足度や介護上の困難に対して、どのような支援が必要なのかを明らかにすることを目的とした。対象者は11名で平均年齢は76±5歳であった。テキストマイニングの分析の結果、介護サービスの内容は概ね満足で、高齢介護者にとって介護支援専門員が生活支援者の中心的存在だった。しかし、介護支援専門員からの情報量には差があり、サービス内容や頻度が介護者のニーズに合致しておらず、みじかだからこそ不満を伝えられない現状も明らかになった。本研究では、共著者として研究の立案・調査の実施・結果の考察・文献の調査・論文の作成の全般にわたり、助言などを行った。</p>
8. 通所介護利用者に対するアンケート自由記述の回答傾向と支援方法の検討	共	2016年6月	第21回日本老年看護学会学術集会（埼玉）	<p>共著者：横島啓子、杉浦圭子、吉野由美子</p> <p>本研究では通所介護を利用する地域在住軽度要介護者に行ったアンケートの自由記述の回答傾向を明らかにし、支援方法を検討することを目的とした。通所介護利用者616人の分析をした結果、29.7%に自由記述部分に回答がみられ、自由記述に回答があるものがない者よりサービス満足度が高かった。テキストマイニングの結果では全体として「皆様」－「明るい」などの肯定的な意見が多く、肯定的な意見は、女性、ADLの自立度が低い者、サービス満足度の高い者に多くみられた。アンケートに付随する自由記述には約3割しか意見を書かず、サービス満足度の低いものは記入しないことやサービスに不満と感じていても言葉に表現できていない利用者が多くいることが明らかになった。</p>

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>2. 学会発表</b>				
9. Moodleの「フォーラム」機能を利用した多職種による高齢介護者に対する支援の試み	共	2016年12月	第36回日本看護科学学会（東京）	共著者：杉浦圭子、横島啓子、林知里 高齢夫婦世帯における介護者の「困りごと」の解消について、Moodleを用いた多職種意見交換のフィードバックの効果を検討することを目的とした。対象者は11名で平均年齢は76.1歳だった。主な訴えはデイサービスの選択方法や食事メニューの考え方と食事介助、パーキンソン病患者の筋緊張の緩和の方法であり、各専門職が具体的な援助方法を提供した。結果、Moodleを利用することによりそれぞれ異なる場所、時間で活動している専門職からの確かなタイムリーなアドバイスを受けることが出来、自分の感情を伝えることが出来たことで心理的負担の軽減に繋がることが示唆された。本研究では、共著者として研究の立案・調査の実施・結果の考察・文献の調査・論文の作成の全般にわたり、助言などを行った。
10. 男性・女性看護師の職業アイデンティティと職務キャリアの傾向	共	2015年9月	第46回日本看護学会－看護管理－学術集会（福岡）	共著者：横島 啓子、吉野 由美子、杉浦圭子、藤尾祐子、黒川 佳子 本研究では男性看護師が増加してきている状況を踏まえ、職業アイデンティティや職務キャリアに関する項目の性差を検討することを目的とした。病院の看護師229名を分析した結果、職業アイデンティティの認識では、女性の方が男性より有意に得点が高く、職務キャリアでは、男性の方が女性より有意に得点が高かった。女性は男性より看護師としての業務をアイデンティティとして受容している一方で男性では看護師という職種を“職業”として捉えている側面が強いことが明らかになった。職場環境の側面からも男性看護師の増加はそこに働く看護師の認識等にも影響を与えている可能性が高いことが示唆された。本研究では、共著者として研究の立案・調査の実施・結果の考察・文献の調査・論文の作成の全般にわたり、助言などを行った。
11. Home Assistance for Aged Patients Couples in Terminal Stage	共	2015年8月	International Family Nursing Conference 2015 (Odense Denmark)	共著者：岡山克憲、木下直子、清田峰子、杉浦圭子 終末期にある高齢夫婦患者の在宅サービスの実態についてインタビューを行った。退院カンファレンスでは、患者の妻は在宅に必要な介護技術に関して積極的に取り組んでおり、自分で介護ができると捉え、ターミナル期にある患者を在宅で介護する恐怖等の訴えがないことから、退院後に介護負担の予測ができていないことが考えられた。そのため、訪問看護師を中心として介護支援専門員と連携を図りながら、患者の生命を守るための退院直後に必要なサービスと継続して行うサービスの2段階の検討がなされていた。しかし、実際に退院後の生活では、夜間の緊急時の対応について、妻だけではなく、地域の病院に事前に調整を行うなど、具体的な支援についての課題が明確になった。本研究では、共著者として結果の考察・文献の調査・論文の作成の全般にわたり、助言などを行った。
12. デイサービスに通所する地域在住軽度要介護者の低栄養状態の状況と関連要因の検討	共	2015年6月	第20回日本老年看護学会学術集会（神奈川）	共著者：Yokojima K., Kurokawa Y., Fujio Y., Yoshino Y., Maeno H., Sugiura K. 本研究では、デイサービスに通所する地域在住軽度要介護者の栄養状態を評価し、その関連要因を明らかにすることを目的とした。デイサービスの通所利用者616人を分析した結果、MNAによる評価では、「低栄養」「低栄養のおそれあり」の状態であるものは約8割を占めていたが、このうち6割以上が自己の栄養状態を「問題ない」と判断していた。このことから、施設スタッフによる客観的なモニタリングが必要であり、定期的な体重測定などにより要介護者の状態を継続的に把握していく必要があると思われる。
13. 前期高齢者及び後期高齢者における主観的記憶力と老年症候群の関連構造の検討	共	2014年11月	第73回日本公衆衛生学会（栃木）	共著者：杉浦圭子、林知里 本研究は主観的記憶力の低下と老年症候群の関連における構造を検討し、老年症候群の早期発見に主観的記憶力の低下が有効であるかを検討することを目的とした。65歳以上の555人を対象とし平均年齢80.2歳）、共分散構造分析を行った。主観的記憶力の低下から潜在変数とした老年症候群への標準化パス係数は0.22で有意であった。前期高齢者と後期高齢者での多母集団同時分析では有意なパスはみられなかった。以上から、主観的記憶力の低下を把握することは前期・後期高齢者の群を問わず老年症候群を早期発見することに有用であることが示唆されたと考えられる。本研究では、共著者として研究の立案・調査の実施・結果の考察・文献の調査・論文の作成の全般にわたり、助言などを行った。

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>2. 学会発表</b>				
14. 無症候性未破裂脳動脈瘤で自然経過観察の選択をした患者の病気体験	共	2014年10月	第41回脳神経外科看護研究会（東京）	共著者：尾形宗士郎、林知里、杉浦圭子、早川和生 未破裂脳動脈瘤の診断を受け、自然経過観察を選択して生活する患者の病気体験を記述することを目的とし、未破裂脳動脈瘤が発見され自然経過観察のために脳神経外科専門病院で外来フォロー中の女性患者6名に対し、質的因子探索的研究デザインで調査を行った。診断直後、患者は『診断の精神的衝撃』『診断直後の戸惑い』『健診を受けたことへの後悔』など、混乱状況に陥っていた。納得できる説明を受けた場合『医師への絶対的信頼感』が形成され、その後の病気体験の基盤となっていた。その後の病気体験は、抱えている背景によって違いがあったが、『動脈瘤の存在を忘れる』『生活スタイルを変えない』という現象が特徴的であった。本研究では、共著者として研究の立案・調査の実施・結果の考察・文献の調査・論文の作成の全般にわたり、助言などを行った。
15. 無症候未破裂脳動脈瘤患者への看護経験の実態	共	2014年10月	第41回脳神経外科看護研究会（東京）	共著者：山本直美、山添幸、登喜和江、澁谷幸、日坂ゆかり、山居輝美、杉浦圭子 本研究は無症候未破裂脳動脈瘤患者に対する看護経験の実態を明らかにすることを目的とし、研究会に参加した看護師91名に対し、自記式質問紙調査を行った。対象者の平均年齢35.4歳、女性が9割、平均看護経験は11年だった。無症候患者の看護に関わった経験は「ある」が76.3%で、関わった症例数は10例以下がもっとも多かった。未破裂脳動脈瘤が発見されたことに関して「患者にはアンラッキーだ」と思ったものは看護師の経験年数が長く、年齢も高く、脳神経系看護経験が少ない傾向があった。
16. 地域在住軽度要介護者の外出頻度の低下に対する口腔機能の影響の検討	共	2013年12月	第33回日本看護科学学会（大阪）	共著者：杉浦圭子、山本直美、登喜和江、日坂ゆかり、山添幸、山居輝美、澁谷幸 2012年11月時点でH県のデイサービスに通所していた地域在住軽度要介護者616件に対し、口腔機能の閉じこもりの指標となる外出頻度の低下に対する影響を検討した。対象者は要介護度が低く、比較的自立度の高い集団であったが、咀嚼機能や嚥下機能の低下が半数近く自覚されていた。また、口腔機能の低下と外出頻度の低下が関連していた。さらに、ロジスティック回帰分析の結果から口腔機能低下の中でも特に咀嚼機能の低下を防ぐことで閉じこもりを予防できる可能性があることが示されたと考えられる。
17. 居宅介護保険サービス利用者の介護者のうつ症状の続柄別の検討	共	2010年6月	第52回日本老年医学会総会（神戸）	共著者：杉浦圭子、林知里 2008年度の大阪府東大阪市に在住する介護保険サービス利用者の介護者928件に対し、居宅介護サービス利用者の介護者のうつ症状を続柄別に検討することにより、介護者の特徴に応じた支援方法を考察することを目的にして分析を行った。妻介護者はうつの症状がほかの続柄より強かった。在宅介護継続への意欲は高いが、ほかの介護者やサービスに頼れない傾向も確認され、妻介護者に対するモニタリングと周囲の有効なサポートを促す必要性があると考えられる。
18. ケアマネジャーの関わりや支援に対する居宅介護サービス利用者の評価とケアプランに対する満足度との関連	共	2010年6月	第52回日本老年医学会総会（神戸）	共著者：杉浦圭子、伊藤美樹子、九津見雅美、菱田知代、磯野安理沙、三上洋 2008年度の大阪府東大阪市に在住する介護保険サービス利用者3808件に対し、ケアマネジャーの関わりや支援に対する利用者の評価がケアプランに対する満足度に与える影響を検討することを目的に分析を行った。独居要介護者では利用者のニーズのアセスメントやモニタリングがケアプラン満足度の向上につながることを示唆された。家族介護者ではケアマネジャーの情報提供に関するサービスがケアプラン満足度の向上につながることを示唆された。本研究では、共著者として研究の立案・調査の実施・結果の考察・文献の調査・論文の作成の全般にわたり、助言などを行った。
19. Prognosis of older people dwelling in community 2: Three-year survive and its affecting psychological and social factors	共	2009年8月	The 4th International Conferences on Community Health Nursing Research (Adelaide South Australia)	共著者：磯野安理沙、菱田知代、杉浦圭子、九津見雅美、伊藤美樹子、三上洋 地域在住介護保険サービス利用者の3年生存率と精神的・社会的要因との関連を明らかにすることを目的とした。2003年7月に大阪府A市において要介護認定をうけサービス利用のある5000人を無作為抽出し、2005年に追跡調査を実施した。A市の65歳以上死亡率と比べ本分析対象者の死亡率は5倍以上であった。生活満足度尺度がより高い群は低い群とくらべ死亡リスクが低かった。女性の要介護2-5はリスクが高かったが、年齢や生活満足度尺度は死亡率と関連がなかった。男女とも世帯収入は死亡リスクと関連がなか

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>2. 学会発表</b>				
20. Social support use and dependence among old people by Living arrangements	共	2009年8月	The 4th International Conferences on Community Health Nursing Research (Adelaide South Australia)	<p>った。本研究では、共著者として研究の立案・調査の実施・結果の考察・文献の調査・論文の作成の全般にわたり、助言などを行った。</p> <p>共著者：Hishida T., Ito M., Kutsumi M., Sugiura K., Omura K., Mikami H.</p> <p>介護保険サービス利用とインフォーマルサポートの特徴を明らかにすることを目的とした。2003年7月に大阪府A市において要介護認定をうけサービス利用のある5000人を無作為抽出し自記式質問紙を郵送により配布回収し、2005年に追跡調査を実施した。3年間で介護保険サービス利用は増加せず、インフォーマルサポートはほとんどなかった。独居の80%が75歳以上であることや生活満足度が3年間低下していたことを考慮すると、精神健康への介入や地域活動などのソーシャルキャピタルの改善が望まれる。本研究では、共著者として研究の立案・調査の実施・結果の考察・文献の調査・論文の作成の全般にわたり、助言などを行った。</p> <p>共著者：Ito M., Hishida T., Omura K., Kutsumi M., Sugiura K., Mikami H.</p>
21. Prognosis of older people dwelling in community 1: Five-year survival analysis for older people using long-term care	共	2009年8月	The 4th International Conferences on Community Health Nursing Research (Adelaide South Australia)	<p>介護が必要な状態にあり在宅で介護保険サービス利用しながら生活している者と同地域の死亡率を比較すること、年齢・要介護度により男女の累積生存率の違いがあるのかを検討することを目的とした。2003年7月に大阪府東大阪市において要介護認定をうけサービス利用のある5000人を無作為抽出した。2008年9月までを観察期間とし死亡をエンドポイントとした。要介護度が重度であるほど死亡率は高くなり、要介護4以下では女性の生存率が高かったが要介護5では男女間に有意な違いはみられなかった。本研究では、共著者として研究の立案・調査の実施・結果の考察・文献の調査・論文の作成の全般にわたり、助言などを行った。</p> <p>共著者：Kutsumi M., Ito M., Hishida T., Omura K., Sugiura K., Mikami H.</p>
22. Effects of employment on male family caregivers' mental health—a comparison between sons and husbands	共	2009年8月	The 4th International Conferences on Community Health Nursing Research (Adelaide South Australia)	<p>要介護者からみた夫介護者と息子介護者における介護者の精神的健康への就労の影響を比較することを目的とした。2004年に大阪府A市における介護保険サービス利用者4482人に自記式質問紙の郵送法により調査を実施し、138人の夫介護者と152人の息子介護者を分析対象とした。夫介護者は息子介護者と比べより長い時間介護しており、介護負担感も強かった。息子介護者の要介護者の年齢や認知障害は夫介護者の要介護者よりも高かった。非就労は介護肯定感にネガティブな影響を与え、息子介護者のうつを増加させる傾向があった。夫において、精神健康は主観的健康度や介護に費やす時間と関連していたが、就労は精神健康とは関連していなかった。</p> <p>共著者：Sugiura K., Kutsumi M., Mikami H., Omura K., Hishida T., Ito M.</p>
23. The caregiver's burden of older people who need nightly home medical care	共	2009年8月	The 4th International Conferences on Community Health Nursing Research (Adelaide South Australia)	<p>在宅医療ケアを担う家族介護者の負担感や状況を明らかにすることを目的とした。2005年に大阪府A市における介護保険サービス利用者3974人に自記式質問紙の郵送法により調査を実施した。971人の家族介護者から返送があり、医療ケアのないもの734人、医療ケアのあるもの237人（さらに夜間医療ケアのあるもの36人、夜間医療ケアのないもの201人）にわけ分析を実施した。介護者の年齢は62.4歳で36.1%が妻介護者であった。介護者の負担は医療ケア実施群で高かった。夜間医療ケアのある群では介護時間が長く介護負担も大きかった。在宅夜間医療ケアを継続している介護者はうつ傾向が強いが介護肯定感が高かった。本研究では、共著者として研究の立案・調査の実施・結果の考察・文献の調査・論文の作成の全般にわたり、助言などを行った。</p> <p>共著者：Omura K., Hishida T., Ito M., Sugiura K., Kutsumi M., Mikami H.</p>
24. 施設入所認知症高齢者の攻撃性へのケアとバーンアウトとの関連	共	2009年6月	第26回日本老年医学学会総会（神奈川）	<p>認知症高齢者の攻撃的な行動（暴言、暴力）へのケアとバーンアウト（情緒的消耗感）との関連を施設ケアスタッフの職種別（介護職・看護職）に明らかにすることを目的とした。分析対象者はケアスタッフ275人で、介護職80.7%、女性74.9%、平均年齢37.7歳であった。同じケアでも情緒的消耗感との相関係数が正負逆の向きを示すものがあったことから職種によって攻撃性へのケアの有する意味が異なることが窺えた。本研究では、共著者として研究の立案・調査の実施・結果の考察・文献の調査・論文の作成の全般にわたり、助言などを行った。</p> <p>共著者：九津見雅美、杉浦圭子、伊藤美樹子、三上</p>

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>2. 学会発表</b>				
25. 介護保険利用下の要介護者の居宅介護サービスに対する満足度の変化に関する検討	共	2009年6月	第26回日本老年医学会総会（神奈川）	洋 要介護者のサービス満足度の変化とその特徴を明らかにすることを目的とした。2003年7月に大阪府A市において要介護認定をうけサービス利用のある5000人を無作為抽出し、2005年に追跡調査を実施し、要介護者本人から2回とも回答の得られた310人を分析対象とした。2003年調査時のサービス満足度は平均3.4点であり、満足度の維持・向上群は241人、低下群は69人であった。維持・向上群は低下群と比べて、要望伝達度、ケアマネジャーの支持的接遇態度の得点変化が高かった。本研究では、共著者として研究の立案・調査の実施・結果の考察・文献の調査・論文の作成の全般にわたり、助言などを行った。 共著者：磯野安理沙、九津見雅美、杉浦圭子、伊藤美樹子、三上洋
26. 居宅介護サービスを利用する家族介護者の介護ストレス対処方略の特徴と変化に関する研究	共	2009年12月	第20回日本老年医学会近畿地方会（大阪）	居宅介護サービスを利用する家族介護者の介護ストレス対処の実態とその2年後の変化について明らかにした。介護負担感は増加し、対処方略の採用は「とにかく精一杯介護する」などであった。介護ストレスへの課題としては問題解決志向型を促す介入やレスパイトケアが可能な社会資源の導入が求められると考える。本研究では、共著者として研究の立案・調査の実施・結果の考察・文献の調査・論文の作成の全般にわたり、助言などを行った。 共著者：菱田知代、磯野安理沙、九津見雅美、杉浦圭子、伊藤美樹子、三上洋
27. 介護保険施設ケアスタッフから入所者家族への関わりと仕事満足度との関連	共	2009年12月	第20回日本老年医学会近畿地方会（大阪）	ケアスタッフから家族への関わりと仕事満足度との関連を明らかにすることを目的とした。仕事満足度には「身体・精神面を伝える (r=.15)」、「絆を保つ役割 (r=.23)」、「信頼関係 (r=.19)」が、継続意欲には「介護に巻き込む (r=.13)」、「信頼関係 (r=.13)」が関連し、「絆を保つ役割」という関わりが仕事満足度に最も強く関連しており、家族への関わりを有することはケアスタッフにとって仕事満足度を高める可能性があることが示された。本研究では、共著者として研究の立案・結果の考察・論文の作成の全般にわたり、助言などを行った。 共著者：九津見雅美、杉浦圭子、伊藤美樹子、三上洋
28. 男性介護者における精神的健康指標に対する就労の影響の続柄別の検討	共	2009年12月	第20回日本老年医学会近畿地方会（大阪）	大阪府東大阪市で介護保険サービス利用者のうち男性介護者に着目し、290名を対象とし、男性介護者において、就労が介護負担感やうつ症状、介護肯定感という精神的健康指標に対して与える影響を検討する。検討する際には、男性介護者の中でも、続柄による違いを明確化することを目的に分析を行った。息子介護者は介護時間や介護負担感が少ないが、就労する割合は夫介護者よりも多く、就労することと精神的健康指標との関連が深かった。夫介護者においては、精神的健康指標に影響を与えるのは就労よりも一日の平均介護時間や介護者自身の健康状態であることがわかった。 共著者：杉浦圭子、伊藤美樹子、三上洋
29. 介護保険制度下の居宅介護サービスに関する利用者の意向・要望	共	2009年10月	第68回日本公衆衛生学会（奈良）	介護保険制度下の居宅介護サービスに関する利用者の意向・要望を2008年にサービス利用者に尋ねた。介護者の負担を訴える記述が多くみられ、サービスの利用制限など保険制度改正に伴う利用者の不満が明らかとなった。本研究では、共著者として研究の立案・調査の実施・結果の考察・文献の調査・論文の作成の全般にわたり、助言などを行った。 共著者：磯野安理沙、菱田知代、杉浦圭子、九津見雅美、伊藤美樹子、三上洋
30. 在宅要介護者における褥瘡有病率と介護状況との関連	共	2009年10月	第68回日本公衆衛生学会（奈良）	一般病院での褥瘡有病率は2.24～3.32%とくらべ、在宅要介護者の褥瘡有病率は5.7%であった。有病率は、65歳以上、また介護期間が長期化し、日常的におむつ交換や車いす・ベッド移乗が必要となることと関係があった。本研究では、共著者として研究の立案・調査の実施・結果の考察・文献の調査・論文の作成の全般にわたり、助言などを行った。 共著者：大村佳代子、菱田知代、九津見雅美、杉浦圭子、伊藤美樹子、三上洋
31. 介護保険サービス利用者の介護者交代に関わる要因の検討	共	2009年10月	第68回日本公衆衛生学会（奈良）	大阪府東大阪市で介護保険サービス利用者に対する調査のうち2005年度と2008年度に両方に回答があった継続利用者の介護者308件に対し、主介護者の交代の実情と交代に関連する要因の検討を目的として分析を行った。夫介護者、息子の妻介護者は交代しやすいが、妻や娘などの助成介護者、要介護者と同居している場合は継続して介護者役割を担っていたことから、社会的な介護規範や世帯構成上交代を希望しても他の人に頼ることができない状況も窺え、今

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>2. 学会発表</b>				
32. 現代GP「親と子の心を支援できる人材育成教育の構築」の取り組み	共	2008年9月	第55回日本小児保健学会（札幌）	後の検討課題である。 共著者：杉浦圭子、伊藤美樹子、九津見雅美、三上洋 大阪大学の現代GPとして「親と子の心を支援できる人材育成教育の構築」の取り組みを紹介するとともに、公開講演会などについての学生アンケートの結果を紹介した。学生のペアレントトレーニングや発達障害についての習得度は向上しており、有用なプログラムであると考えられた。本研究では、共著者として調査の補助、論文の作成において助言などを行った。
33. 学校医における「医療的ケア」の実態と学校医の認識	共	2008年4月	第50回日本小児神経学会総会（東京）	共著者：永井利三郎、酒井佐枝子、藤原千恵子、荒木田美香子、阿曾洋子、新田紀枝、遠藤淑美、伊藤美樹子、新家一輝、奥野裕子、大塚敏子、横川しのぶ、高間さとみ、杉浦圭子 大阪府下の幼稚園・小・中・高等学校の学校医1424名に対し、「医療的ケア」の実態や学校医の意識を明確にすることを目的に調査を行った。「医療的ケア」を経験した学校医は22.1%であり、実施者の7割は養護教諭だった。「医療的ケア」を必要とする児童生徒の一般校への入学については賛成39.7%、反対30.3%であった。本研究では、共著者として調査の補助、論文の作成において助言などを行った。
34. 東大阪市の居宅介護サービス利用者追跡調査 第1報：調査概要と要介護者予後	共	2008年10月	第67回日本公衆衛生学会（福岡）	共著者：横川しのぶ、永井利三郎、池田友美、奥野裕子、杉浦圭子、高間さとみ、田川哲三、根岸宏邦、服部英司、船戸政久 居宅介護サービス利用者の5000人の追跡調査の結果、死亡者割合は2004年で10.8%、2005年で10.6%であった。入院入所による在宅介護の中止は2004年に339件、2005年に400件認められた。本研究では、共著者として研究の立案・調査の実施・結果の考察・文献の調査・論文の作成の全般にわたり、助言などを行った。
35. 東大阪市の居宅介護サービス利用者追跡調査 第2報：認知障害の該当状況とその特徴	共	2008年10月	第67回日本公衆衛生学会（福岡）	共著者：伊藤美樹子、杉浦圭子、九津見雅美、大村佳代子、菱田知代、三上洋 居宅介護サービス利用者の5000人の追跡調査のデータの二次解析を行った。2003年に認知障害がみられなかった群に着目し、2年後の認知障害該当状況を明らかにしたところ、何らかの認知障害が出現したものは16.5%であった。「食べた食事を食べていない」という項目は、認知障害の初期症状として介護者に気づかれやすい項目であることが明らかとなった。本研究では、共著者として研究の立案・調査の実施・結果の考察・文献の調査・論文の作成の全般にわたり、助言などを行った。
36. 東大阪市の居宅介護サービス利用者追跡調査 第3報：介護負担感の変化	共	2008年10月	第67回日本公衆衛生学会（福岡）	共著者：九津見雅美、杉浦圭子、菱田知代、大村佳代子、伊藤美樹子、三上洋 大阪府東大阪市に在住する介護保険サービス利用者のうち2003～2005年度調査で連続して有効回答が得られたもの1,167件のうち有効な家族介護者441件を分析対象者とし、3年間の介護負担感の変化を明らかにし、変化がみられる介護者の特徴を明らかにすることを目的として調査を行った。介護者全体で介護負担感を経年的に悪化していた。特に娘介護者、または50歳代の介護者で悪化していることが明らかになった。また、介護負担感の高まりには、要介護者の認知障害の程度の悪化が関与していることが窺えた。
37. 東大阪市の居宅介護サービス利用者追跡調査 第4報：うつ気分と介護肯定感	共	2008年10月	第67回日本公衆衛生学会（福岡）	共著者：杉浦圭子、九津見雅美、伊藤美樹子、大村佳代子、菱田知代、三上洋 居宅介護サービス利用者の5000人の追跡調査の結果、介護者のうつ気分、介護肯定感の変化に有意差はみられなかったものの、介護肯定感は低下傾向を示した。本研究では、共著者として研究の立案・調査の実施・結果の考察・文献の調査・論文の作成の全般にわたり、助言などを行った。
38. 東大阪市の居宅介護サービス利用者追跡調査 第5報：利用者負担額の変化に関する検討	共	2008年10月	第67回日本公衆衛生学会（福岡）	共著者：菱田知代、大村佳代子、杉浦圭子、九津見雅美、伊藤美樹子、三上洋 居宅介護サービス利用者の5000人の追跡調査の結果、要介護度別にみた平均利用者負担額および利用者負担額上限以上利用しているものは、年々増加していた。サービスを利用しない理由にサービスの情報不足とした人が減少していたことから、年々サービス内容や事業者に対する理解が浸透していることが窺えた。本研究では、共著者として研究の立案・調査の実施・結果の考察・文献の調査・論文の作成の全般にわたり、助言などを行った。

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>2. 学会発表</b>				
39. 「親と子の心を支援できる人材育成教育」第1報：発達障害についての理解度	共	2008年10月	第67回日本公衆衛生学会（福岡）	大阪大学看護学専攻の3回生94名に対し、学生の発達障害の理解および子どもと親への具体的支援方法への木月の進化を目指すことを目的として自由記述式の調査、分析を行った。演習や体験などを通して、障害のみならず親子や教育関係者への共感的な理解が深まったことが明らかとなった。本研究では、共著者として調査の補助、論文の作成において助言などを行った。 共著者：奥野裕子、永井利三郎、酒井佐枝子、荒木田美香子、藤原千恵子、新田紀枝、伊藤美樹子、遠藤淑美、新家一輝、大塚敏子、杉浦圭子、横川しのぶ、高間さとみ
40. 「親と子の心を支援できる人材育成教育」第2報：parent trainingの学習効果について	共	2008年10月	第67回日本公衆衛生学会（福岡）	大阪大学看護学専攻の3回生94名に対し、学生の発達障害の理解および子どもと親への具体的支援方法への木月の進化を目指すことを目的として自由記述式の調査、分析を行った。演習や体験などを通して、障害のみならず親子や教育関係者への共感的な理解が深まったことが明らかとなった。本研究では、共著者として調査の補助、論文の作成において助言などを行った。 共著者：奥野裕子、永井利三郎、酒井佐枝子、荒木田美香子、藤原千恵子、新田紀枝、伊藤美樹子、遠藤淑美、新家一輝、大塚敏子、杉浦圭子、横川しのぶ、高間さとみ
41. 介護保険制度改正にともなう介護予防通所系サービスの選択的サービス利用状況	共	2007年6月	第25回日本老年医学会総会（札幌）	大阪府東大阪市に在住する介護保険サービス利用者のうち要支援1、2の377件を対象とし、介護予防通所系サービスにおける「栄養改善」「口腔機能の向上」「運動器の機能向上」の選択的サービス利用状況を把握し、今後の課題を検討することを目的として調査を行った。選択的サービスが導入されて半年、利用率は0.5～2.1%と低く、認知度も低かった。本研究では、共著者として研究の立案・調査の実施・結果の考察・文献の調査・論文の作成の全般にわたり、助言などを行った。 共著者：中谷安寿、山北順子、九津見雅美、杉浦圭子、三上洋
42. 介護保険制度改正にともない新しく要支援2に認定されたことによる困難に関する実態調査	共	2007年10月	第66回日本公衆衛生学会（愛媛）	大阪府東大阪市に在住する介護保険サービス利用者のうち制度改正に伴い要介護1から要支援にとなった115件を分析対象とし、要介護度が変化したことにより生じた困難を明らかにすることを目的として調査を行った。新しい要介護度を不適切と感じた利用者は約半数であり、サービス満足度も低く回答されていた。本研究では、共著者として研究の立案・調査の実施・結果の考察・文献の調査・論文の作成の全般にわたり、助言などを行った。 共著者：中谷安寿、山北順子、杉浦圭子、九津見雅美、伊藤美樹子、三上洋
43. 介護保険利用下の介護者における就労継続にかかわる要因の縦断的検討	共	2007年10月	第66回日本公衆衛生学会（愛媛）	大阪府東大阪市に在住する介護保険サービス利用者のうち2003～2005年度調査で連続して有効回答が得られたもの1,167件のうち有効な家族介護者441件を分析対象者とし、介護保険を利用している介護者の就労を可能にする要因を3年間の縦断調査のサンプルを用いて検討することを目的として調査を行った。全体の就労率は経年的に減少していた。就労の継続の可否については、介護者・要介護者の基本的属性や要介護者の心身の状況の変化、副介護者の有無よりも、介護者自らが介護よりも仕事にバランスを重くおいていることがもともと関係性が強いことが明らかとなった。 共著者：杉浦圭子、伊藤美樹子、九津見雅美、三上洋
44. 介護者の在宅介護継続意向に関連する居宅介護サービスの検討	共	2006年8月	第33回日本看護研究学会学術集会（大分）	大阪府東大阪市に在住する介護保険サービス利用者3934件のうち、家族介護者が回答した757件を対象に、介護保険制度における居宅介護サービスの利用と介護者の在宅介護継続移行との関連を明らかにすることを目的に調査を行った。介護者の健康状態がよいこと、要介護者の認知障害が軽度であることは介護者の在宅介護の継続意向を持つことと関連がみられた。逆に、デイケア・デイサービス、ショートステイは施設入所意向と関連がみられた。本研究では、共著者として研究の立案・調査の実施・結果の考察・文献の調査・論文の作成の全般にわたり、助言などを行った。 共著者：大角和、九津見雅美、杉浦圭子、伊藤美樹子、三上洋
45. 在宅介護者における褥瘡と介護状況との関連	共	2006年8月	第33回日本看護研究学会学術集会（大分）	大阪府東大阪市に在住する介護保険サービス利用者のうち要介護度が1以上で家族介護者が記入した971件を対象に調査を行い、介護保険サービス利用者における褥瘡の発生状況を把握し、褥瘡の有無に関連

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>2. 学会発表</b>				
46. 「利用者本位」のケアマネジメントの実施状況	共	2006年11月	第65回日本公衆衛生学会（富山）	<p>する要因を検討することを目的とした。褥瘡の発生頻度は全体では7.9%で、要介護5では3割にみられた。褥瘡の発生頻度と訪問看護利用とは関連がみられた。本研究では、共著者として研究の立案・調査の実施・結果の考察・文献の調査・論文の作成の全般にわたり、助言などを行った。</p> <p>共著者：伊藤美樹子、大角和、九津見雅美、杉浦圭子、三上洋</p> <p>2003年4月からの改正から2年経過した現在、このような利用者本位のケアマネジメントがどの程度浸透してきているのかを利用者に対する調査で明らかにする。サービス選択するための情報提供-理解の状況は改善している傾向がみられた。一方ではサービスモニタリングや、サービス理解が不十分なままでの利用も認められ、ケアプラン内容の質という課題も合わせて、ケアマネの力量形成や質の管理を行なうことが必要である。本研究では、共著者として研究の立案・調査の実施・結果の考察・文献の調査・論文の作成の全般にわたり、助言などを行った。</p> <p>共著者：山北順子、九津見雅美、杉浦圭子、伊藤美樹子、三上洋</p>
47. 家族介護者のサービス利用意識と居宅介護サービス利用状況の変化に関する分析	共	2005年6月	第24回日本老年医学会総会（東京）	<p>大阪府A市において2000-2002年に年に1回ずつ行った横断調査において、家族介護者のサービス利用意識およびサービス利用状況の変化を明らかにすることを目的として分析を行った。サービス利用意識には変化がみられず、ホームヘルプ、福祉用具の貸与の利用割合は増加し、訪問看護やショートステイは減少していた。本研究では、共著者として研究の立案・調査の実施・結果の考察・文献の調査・論文の作成の全般にわたり、助言などを行った。</p> <p>共著者：九津見雅美、大角和、丸谷祐子、杉浦圭子、三上洋</p>
48. 要介護度別にみた介護者側の在宅介護継続要因の検討	共	2005年6月	第24回日本老年医学会総会（東京）	<p>大阪府東大阪市に在住する介護保険サービス利用者4482件を対象とし、要介護度を軽度群（要支援、要介護1-2）、重度群（要介護3-5）に分類し、介護者側のそれぞれの在宅介護継続に関連する要因を検討することを目的とした調査を行った。軽度群では介護量が比較的少ないこと、重度群は介護者の健康状態がよいことが在宅介護の継続要因として示唆された。本研究では、共著者として研究の立案・調査の実施・結果の考察・文献の調査・論文の作成の全般にわたり、助言などを行った。</p> <p>共著者：大角和、杉浦圭子、丸谷祐子、九津見雅美、三上洋</p>
49. 居宅介護保険サービスを利用している要介護者とその家族介護者の疾患別にみた介護負担感の検討	共	2005年6月	第24回日本老年医学会総会（東京）	<p>大阪府東大阪市に在住する介護保険サービス利用者のうち介護者が存在する1215名を対象に、家族介護者における介護負担感の関連要因としてとして考えられる要介護者、家族介護者の疾患の種類を明らかにすることを目的に調査を行った。介護負担感、要介護者の認知障害や精神疾患等の意思疎通困難な疾患がある場合に強く、家族介護者自身の整形外科疾患のような身体的な負担を生じやすい場合に強いことが示唆された。本研究では、共著者として研究の立案・調査の実施・結果の考察・文献の調査・論文の作成の全般にわたり、助言などを行った。</p> <p>共著者：丸谷祐子、杉浦圭子、九津見雅美、大角和、三上洋</p>
50. 要介護者の問題行動由来の介護負担感と要介護度および介護保険サービス利用との関係の検討	共	2005年6月	第24回日本老年医学会総会（東京）	<p>大阪府東大阪市に在住する介護保険サービス利用者のうち介護者が存在する1818名を対象に、要介護者の問題行動由来の介護負担感と要介護度との関係性を明らかにし、サービス利用の特徴を把握することを目的とした調査を行った。要介護度は問題行動由来の介護負担感のうち介護量の増大と強く関連していた。ホームヘルプサービスは高齢者の問題行動に対し、負担を感じていると利用抑制されることが明らかになった。</p> <p>共著者：杉浦圭子、三上洋、伊藤美樹子</p>
51. 介護保険制度利用下の要介護者が在宅生活を継続できた要因の検討	共	2005年11月	第64回日本公衆衛生学会（札幌）	<p>大阪府H市に在住の介護保険サービス利用者5000件に対し、2003～2005年に縦断調査を行った。本研究では、要介護者が在宅での生活を継続できた要因を検討することを目的とした。結果として、在宅生活の継続には記入者である家族等が「要介護者本人が在宅を希望している」と認識していることが深く関連することが示唆された。本研究では、共著者として研究の立案・調査の実施・結果の考察・文献の調査・論文の作成の全般にわたり、助言などを行った。</p> <p>共著者：大角和、杉浦圭子、九津見雅美、三上洋</p>
52. Service Utilization Trend in Low Care Group for 3 Consecutive	共	2005年10月	The 3rd International conference on Commun	<p>本研究では、介護保険施行開始である2000年から2002年までの3年間の在宅介護サービスの利用状況の変</p>

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>2. 学会発表</b>				
e Years of 2000 to 2002			ity Health Nursing Research (Tokyo)	化を調査した。対象者の要介護度別に軽度要介護度と重度要介護度別に、サービスの利用状況の変化を比較した。特に軽度要介護高齢者において訪問看護、訪問入浴のサービス利用が増加していた。本研究では、共著者として研究の立案・調査の実施・結果の考察・文献の調査・論文の作成の全般にわたり、助言などを行った。 共著者：Kutsumi, M., Sugiura, K., Ito, M., Mikami, H.
53. 高齢者を介護する家族の介護状況および介護肯定感の年齢別比較	共	2004年6月	第7回日本地域看護学会学術集会（大阪）	大阪府東大阪市に在住する介護保険サービス利用者のうち介護者が存在する1762名を対象に、介護者を65歳未満の若年介護者と75歳未満の前期高齢介護者と75歳以上の後期高齢介護者に分け、介護状況や主観的側面の特徴を把握することを目的とした調査を行った。本研究では、共著者として研究の立案・調査の実施・結果の考察・文献の調査・論文の作成の全般にわたり、助言などを行った。 共著者：荒木智子、杉浦圭子、有馬志津子、伊藤美樹子、三上洋
54. 要介護者の施設入所意向とサービス利用状況	共	2004年5月	第46回日本老年医学会学術集会（東京）	要介護度を軽度群（要支援、要介護1～2）と重度群（要介護3～5）に分類しそれぞれの在宅介護継続に関連する要因を検討することを目的とした。軽度群の在宅介護継続者は介護者の主観的健康感が高く、介護より就労に重点をおき、比較的介護量が少ないことが示唆された。重度群の在宅介護継続者は介護者の年齢が若く、治療中の疾患がなく、主観的健康感が高いことから介護者の健康が介護の継続に関係することが示唆された。本研究では、共著者として研究の立案・調査の実施・結果の考察・文献の調査・論文の作成の全般にわたり、助言などを行った。 共著者：九津見雅美、杉浦圭子、伊藤美樹子、三上洋
55. ケアマネジャーの支持的接遇態度への関連要因の検討	共	2004年5月	第46回日本老年医学会学術集会（東京）	ケアマネジャーの支持的接遇態度のケアプラン満足度に対する影響を確認し、関連要因を検討することを目的とした。サービス利用者はケアマネジャーに対し約半数が支持的であると感じていたが、月1回以上の訪問が厚生労働省令にて定められているにもかかわらず、それに満たないケースが全体の約2割にみられた。ケアマネジャーが支持的であるほどケアプランに満足することが明らかとなった。 共著者：杉浦圭子、九津見雅美、伊藤美樹子、三上洋
56. 看護学生の非喫煙継続への意思に関連する要因の検討	共	2004年11月	第63回日本公衆衛生学会（松江）	大阪府東大阪市に在住する介護保険サービス利用者のうち2864名を対象に、介護保険の諸サービスを利用し在宅で生活している高齢者の生活満足度と介護度等との関連を明らかにすることを目的とした調査を行った。本研究では、共著者として研究の立案・調査の実施・結果の考察・文献の調査・論文の作成の全般にわたり、助言などを行った。 共著者：文鐘聲、杉浦圭子、九津見雅美、伊藤美樹子、三上洋
57. 家族介護者の介護保険サービスの決定と情報探索行動との関係	共	2003年5月	第29回日本看護研究学会学術集会（大阪）	大阪府H市に在住する介護保険サービス利用者とその家族に対して調査を行い、特に家族のサービス決定に関連する要因の検討をすることを目的とした。本研究では、共著者として研究の立案・調査の実施・結果の考察・文献の調査・論文の作成の全般にわたり、助言などを行った。 共著者：九津見雅美、足立登志子、杉浦圭子、伊藤美樹子、三上洋
58. 介護者の性別にみた在宅介護の現状	共	2003年5月	第29回日本看護研究学会学術集会（大阪）	大阪府H市に在住する介護保険サービス利用者とその家族に対して調査を行い、最終的に868組の介護者と家族介護者を対象とし、本邦における介護者における要介護者の心身の状態、介護の内容、ストレスの程度の性差を明らかにすることを目的とした。結果として、欧米の先行研究とほぼ同様の結果が得られ、女性介護者は男性介護者より高齢で認知障害の重い要介護者を介護していた。また、介護時間は長く、多くの種類の介護を行っていた。しかし、男性介護者の中にもうつ状態が比較的高い群も存在することが明らかとなった。 共著者：杉浦圭子、足立登志子、九津見雅美、伊藤美樹子、三上洋
59. 関節リウマチ患者における笑いの経験と抑うつとの関連の検討	共	2003年5月	第29回日本看護研究学会学術集会（大阪）	A大学医学部附属病院およびB総合病院整形外科に通院する関節リウマチ患者495名に対し、ユーモアに関連して笑うという行動に着目し、関節リウマチ患者における笑いの経験を測定する尺度作成を試み、ADL障害、疼痛、抑うつとの関連について考察し、今後の看護における笑いの研究について示唆を得ることを目的とした調査を行った。本研究では、共著者と

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>2. 学会発表</b>				
60. 介護保険サービス利用に関する3年間の実態調査(第4報)－介護負担の経年的変化－	共	2003年11月	第62回日本公衆衛生学会(京都)	<p>して研究の立案・調査の実施・結果の考察・文献の調査・論文の作成の全般にわたり、助言などを行った。</p> <p>共著者：足立登志子、杉浦圭子、九津見雅美、三上洋</p> <p>上記の発表に続き第4報では、介護者の年代や要介護者の介護度別にサービス利用後の介護負担の変化を経年的に把握することを目的とした。本研究では、共著者として研究の立案・調査の実施・結果の考察・文献の調査・論文の作成の全般にわたり、助言などを行った。</p> <p>共著者：山平優子、杉浦圭子、九津見雅美、谷川緑、小林京子、伊藤美樹子、三上洋</p>
61. 介護保険サービス利用に関する3年間の実態調査(第1報)－介護保険サービス利用状況－	共	2003年11月	第62回日本公衆衛生学会(京都)	<p>大阪府東大阪市では平成12年～14年に在宅介護保険サービス(以下サービス)利用状況把握のための調査を行った。一連の報告で3年間の利用状況の年次推移を明らかにする。第1報では要介護者の基本属性およびサービス利用について述べた。本研究では、共著者として研究の立案・調査の実施・結果の考察・文献の調査・論文の作成の全般にわたり、助言などを行った。</p> <p>共著者：三上洋、九津見雅美、杉浦圭子、谷川緑、山平優子、小林京子、伊藤美樹子</p>
62. 介護保険サービス利用に関する3年間の実態調査(第2報)－利用者の意識や態度－	共	2003年11月	第62回日本公衆衛生学会(京都)	<p>上記の発表に続き第2報では、在宅介護サービス利用者の要望・伝達度、サービス利用に対する意識およびサービス満足度の年次推移を明らかにすることを目的とした。本研究では、共著者として研究の立案・調査の実施・結果の考察・文献の調査・論文の作成の全般にわたり、助言などを行った。</p> <p>共著者：九津見雅美、杉浦圭子、谷川緑、山平優子、小林京子、伊藤美樹子、三上洋</p>
63. 在宅関節リウマチ患者の介護保険制度利用の状況とQOLに関する検討	共	2003年11月	第62回日本公衆衛生学会(京都)	<p>2医療施設の整形外科に通院する関節リウマチ患者のうち40歳以上のものに着目し、495名を対象とした調査を行った。本研究では、関節リウマチ患者の介護保険制度利用の状況について明らかにし、患者のQOL向上について検討することを目的とした。この研究では、共著者として研究の立案・調査の実施・結果の考察・文献の調査・論文の作成の全般にわたり、助言などを行った。</p> <p>共著者：足立登志子、杉浦圭子、三上洋</p>
64. 在宅関節リウマチ患者の介護保険制度利用の状況とQOLに関する検討	共	2003年11月	第62回日本公衆衛生学会(京都)	<p>2医療施設の整形外科に通院する関節リウマチ患者のうち40歳以上のものに着目し、495名を対象とした調査を行った。本研究では、関節リウマチ患者の介護保険制度利用の状況について明らかにし、患者のQOL向上について検討することを目的とした。この研究では、共著者として研究の立案・調査の実施・結果の考察・文献の調査・論文の作成の全般にわたり、助言などを行った。</p> <p>共著者：足立登志子、杉浦圭子、三上洋</p>
65. 介護保険サービス利用に関する3年間の実態調査(第3報)－家族介護者の状況	共	2003年11月	第62回日本公衆衛生学会(京都)	<p>上記の発表に続き第3報では、サービス利用者の家族介護者の介護状況についての年次推移を明らかにすることを目的とした。3年間で介護者の年齢が高くなっていったが、介護者自身の心身の状態では、サービス利用により介護負担感が減ったと感じているものが増加し、くつろげる時間が確保され、健康状態をよいと判断するものが増加していた。さらに、今後の意向でもサービスを利用しての在宅介護継続を望むものが増加しており、介護保険制度の浸透とともに介護者の負担も軽減されつつあることが示唆された。</p> <p>共著者：杉浦圭子、九津見雅美、谷川緑、山平優子、小林京子、伊藤美樹子、三上洋</p>
66. 大学におけるたばこ対策(第1報)－保健医療系学生のたばこに対する態度への関連要因の検討－	共	2002年11月	第61回日本公衆衛生学会(埼玉)	<p>大学医学部保健学科の学部学生633名を対象とし、保健医療系大学生のたばこに対する態度を明らかにし、本人と周囲の喫煙状況及びこれまでに行ってきたたばこに関する教育がたばこに対する態度に及ぼす影響について検討することを目的とした。本研究では、共著者として研究の立案・調査の実施・結果の考察・文献の調査・論文の作成の全般にわたり、助言などを行った。</p> <p>共著者：仲下祐美子、足立登志子、杉浦圭子、九津見雅美、谷川緑、山平優子、有馬志津子、三上洋</p>
67. 要介護認定者における在宅サービス非利用者の実態調査	共	2002年11月	第61回日本公衆衛生学会(埼玉)	<p>市在住の要介護認定者のうちサービス利用者1760名とサービスの利用実績のない2640名を対象とし、サービス利用者と非利用者を比較することで、その相違点を明らかにし、さらに非利用者において、過去にサービスの利用経験がある者とならない者でそれぞれ</p>

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>2. 学会発表</b>				
68. 介護保険制度に対する利用者の意識～介護保険施行後半年と1年半の調査～	共	2002年11月	第61回日本公衆衛生学会(埼玉)	の特徴を明らかにすることを目的とした。 共著者：杉浦圭子、九津見雅美、足立登志子、仲下祐美子、谷川緑、山平優子、伊藤美樹子、三上洋 介護保険施行後半年の2000年10月と1年後の2001年10月に、大阪府A市の要介護高齢者およびその家族に対する「介護保険サービス状況調査」を実施し、自由記入欄の「居宅介護サービスや介護保険制度などについての意見・要望、感想」に表現された介護保険制度に対する利用者の意識に関する質的分析を行った。特にケアマネジャーに関しては、〈質がよい〉とする記述も数例みられたが〈機能が不足している〉とする記述が圧倒的に多かった。本研究では、共著者として研究の立案・調査の実施・結果の考察・文献の調査・論文の作成の全般にわたり、助言などを行った。
69. 介護保険制度におけるサービス利用者の主体的な選択に関連する要因の検討	共	2002年11月	第61回日本公衆衛生学会(埼玉)	共著者：林知里、小林京子、九津見雅美、足立登志子、杉浦圭子、仲下祐美子、尾ノ井美由紀、伊藤美樹子、三上洋 介護保険サービスを利用する1031人に対して、サービス利用者を要介護高齢者と介護者とし、利用者によるサービスの主体的な選択の程度を明らかにし、主体的な選択の程度に関連する要因を明らかにすることを目的として調査を行った。本研究では、共著者として研究の立案・調査の実施・結果の考察・文献の調査・論文の作成の全般にわたり、助言などを行った。
70. 大学におけるたばこ対策(第2報)ー保健医療系学生の喫煙とその関連要因の検討ー	共	2002年11月	第61回日本公衆衛生学会(埼玉)	共著者：九津見雅美、足立登志子、杉浦圭子、仲下祐美子、伊藤美樹子、三上洋 大学医学部保健学科の学部学生633名を対象とし、たばこに対する態度の喫煙への影響を明確にするため、本研究では喫煙の有無を従属変数とした関連要因の検討を行うことを目的として調査を行った。本研究では、共著者として研究の立案・調査の実施・結果の考察・文献の調査・論文の作成の全般にわたり、助言などを行った。
71. 勤労男性の介護に関する意識調査	共	2001年11月	第60回日本公衆衛生学会(香川)	共著者：足立登志子、仲下祐美子、杉浦圭子、九津見雅美、谷川緑、山平優子、有馬志津子、三上洋 中小企業に勤務する291名の成人男性を対象に勤労男性の介護に関する意識の実態調査を行った。本研究では、研究室の既存のデータを2次解析し、共著者として研究の立案、結果の考察・文献の調査・論文の作成の全般にわたり、助言などを行った。
<b>3. 総説</b>				
<b>4. 芸術(建築模型等含む)・スポーツ分野の業績</b>				
<b>5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等</b>				
<b>6. 研究費の取得状況</b>				
1. 都市部無縁社会における社会的孤立予防プログラム・地域ネットワーク構築に関する研究	共	2017年4月～	科学研究費補助金基盤研究(C)	高齢者の社会的孤立に関して、【①都市部に居住する独居高齢者に対して、個別的に自覚性を含む交流頻度と活動状況、心身の状況を詳細に把握する。】 【②都市公営住宅を一単位とし、独居高齢者の社会的孤立の状況および主観的幸福感などの精神的指標との関連性を検討する(量的解析)。また、将来的なICT(Internet Communication Technology)の活用も想定し、基本的なインターネット環境なども把握する。】これらのデータ収集、解析より新しい観点からの介入アプローチの構築の一助とすることを目的とする。 共同研究者：杉浦圭子(代表)、横島啓子(分担)、福尾恵介
2. ロボットを用いた認知症高齢者に対するセルフモニタリングシステムの構	共	2017年4月	科学研究費補助金基盤研究(C)	本研究ではセルフモニタリングの手法を軽度認知症高齢者でも実施可能な方法として、音声・画像を記録できるコミュニケーションロボットを用いて実践する。現在コミュニケーションロボットはインターネット環境を必要とするが、インターネット環境を必要としない動作環境を構築し、独居高齢者及び認知症高齢者の介護予防を目的としたシステムを実現することを目的とする。 共同研究者：横島啓子(代表)、杉浦圭子(分担)、久山かおる、福尾恵介、徳重あつ子
3. ICTを活用した独居高齢者の生活・健康状態把握のためのプログラ	共	2016年4月～	平成28年度 科研費学内奨励金	独居高齢者の健康状態・生活リズム・精神状態の日内変動を捉えることができるプログラムの開発を行

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>6. 研究費の取得状況</b>				
△開発				
4. 予防・治療・在宅療養を視野に入れた脳卒中包括的看護実践活動モデル構築に関する研究	共	2015年4月～	科学研究費補助金基盤研究 (C)	うこととする。具体的には、バーコードリーダーを用い、簡単な絵文字を使い自らの状況・感情が発信できるシステムをプログラムし、高齢者から発信された情報を分析する。 共同研究者：横島啓子（代表）、杉浦圭子、久山かおる  本研究では、本研究は、予防的医療の観点から脳卒中予備軍や無症候性脳血管障害患者（以下、無症候性患者）あるいは脳卒中患者の生涯健康の観点から包括的視点に立った看護活動とそれに求められる脳卒中看護専門職性の検討を目的とする。具体的には、包括的看護活動検討の範囲を次のように捉え、脳卒中予防的医療に関しては無症候性患者の健康生活の質（QOL）の検討やメタボリックシンドロームに代表される脳卒中予備軍となる人々の健康管理の観点、脳卒中患者においては、急性期～回復期、さらには維持期における脳卒中患者の生涯にわたる長期的健康生活の質（QOL）につながることを視野に入れ、看護の専門職性の観点から包括的看護実践活動の構築をめざす。  共同研究者：山本直美（代表）、登喜和江、杉浦圭子（分担）、山居輝美、日坂ゆかり、岩佐美香、澁谷幸、山添幸
5. 障害高齢者の家族介護者の1年後の精神的ストレスの変化にかかわる介護保険サービス利用の検討	単	2003年2月	大阪ガスグループ福祉財団（財）	大阪府A市に在住する要介護高齢者の家族介護者に対し、2年間の縦断調査を行なうことにより、サービス利用が介護ストレスに及ぼす影響を明らかにすることを目的とした研究に対し、45万の助成金を取得した。本研究の結果は2005年6月に報告書としてまとめられ前述の学術論文3として発行された。

学会及び社会における活動等

年月日	事項
1. 2016年4月～現在	日本看護研究学会
2. 2014年12月～現在	日本老年看護学会
3. 2013年4月～現在	日本看護科学学会
4. 2000年6月～現在	日本公衆衛生学会